高知県香南市発掘調査報告書　第６集

曽我遺跡

―中ノ村地区経営体育成緊急支援事業に伴う発掘調査報告書―

2011．3

香南市教育委員会

曽我遺跡

—中ノ村地区経営体育成緊急支援事業に伴う発掘調査報告書—

2011. 3

香南市教育委員会

緑釉陶器（SX10）

円面硯（SX11）

序

香南市野市町曽我地区は、香我美町との境界に接し香宗川と山北川に挟まれ、温暖で水利に恵まれ古くから稲作が盛んに行われている地域です。昭和62年には圃場整備事業を導入し農業の近代化が図られ、現在ではビニールハウスによる花の栽培等も行われています。

昭和62年度に行われた圃場整備事業に伴う発掘調査では、9世紀の役所関係の建物跡が確認されました。今回の発掘調査でも緑釉陶器や円面硯が発見され、同時期の役所がかなり広い範囲に広がっていたようです。現在では曽我遺跡の中央を東西に伸びる県道沿いに民家がありますが、昭和40年ごろは田んぼばかりであったように記憶しています。遺跡の発掘調査により時代とともに人々の営みの変化が徐々に解明されるにつれ感慨深いものがあります。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターをはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成23年3月

高知県香南市教育委員会
教育長　別役　朋之

例言

1．本書は、野市町(現香南市)教育委員会が平成14年度に実施した中ノ村地区経営体育成緊急支援事業に伴う曽我遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．曽我遺跡は、高知県香南市野市町中ノ村字岩田1651番地に所在する。

3．試掘調査は平成14年7月8日に実施し、本発掘調査は平成14年9月2日から10月3日にかけて実施した。

4．調査対象面積　738㎡
試掘調査面積　16㎡
本発掘調査面積　500㎡

5．試掘調査・本発掘調査時(平成14年度)の調査体制は以下の通りである。

事務担当	久家 英生	野市町教育委員会	生涯学習課　主幹
調査員	吏谷 大介	㈱野市町開発公社	埋蔵文化財調査員

6．曽我遺跡の整理作業及び報告書作成作業は平成20年度まで吏谷大介(香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係)及び溝渕真紀(同)が担当し、平成22年度は宮地啓介(同香南市文化財センター)が20年度までの成果を引き継ぎ、報告書作成作業を行った。

7．報告書刊行時(平成22年度)の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下の通りである。

課　長	吉田　豊	嘱託職員	宮地 啓介
係　長	山本 八也	臨時職員	小松 経子
主任調査員	松村 信博	〃	宮本 幸子
主　監	竹中 ちか	〃	水田 紀子
		〃	齋藤 美幸

8．本書の編集・執筆は宮地が行った。遺物写真撮影・編集は松村が行った。

9．本報告書中で使用する方位は真北を基準とし、公共座標は世界測地形第Ⅳ系に拠った。掲載した地形図等は、特に表示のない場合は上方が北である。

10．発掘現場作業に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
[発掘調査]　佐野宣重　橿尾俊喜　河村美佐子　新宅広子
[重機オペレーター]　清遠勝秀

11．遺物整理・報告書作成等に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
小松経子　宮本幸子　水田紀子　齋藤美幸

12．遺構の略号は、SD(溝状遺構)・SX(性格不明遺構)・P(ピット状遺構)等と表記した。

13．出土遺物は「02 - NSG」と注記し、関連図面・写真と共に香南市文化財センター(高知県香南市香我美町山北1553 - 1)で保管している。

14．本報告書作成(遺物観察)に際して、池澤俊幸氏(高知県埋蔵文化財センター)、吉成承三氏(同)に貴重な御教示・御助言を頂いた。記して謝意を表する次第である。

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法
第1節　調査の経緯 …… 1
第2節　調査の方法 …… 3

第Ⅱ章　曽我遺跡周辺(香南市域)の地理・歴史的環境
第1節　地理的環境 …… 5
第2節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の成果
第1節　調査対象地の概要 …… 11
第2節　基本層序 …… 12
第3節　遺構と遺物
1. 遺構
溝状遺構(SD) …… 15
性格不明遺構(SX) …… 17
ピット状遺構(P) …… 22
2. 包含層出土遺物 …… 23

第Ⅳ章　総括
第1節　曽我遺跡出土の古代土器と遺跡の性格 …… 27
第2節　祭祀空間としての曽我遺跡 …… 30
第3節　交通・流通からみた香宗川流域 …… 33
第4節　条里地割 …… 35

挿図目次

第1図　香南市及び曽我遺跡位置図 …… 1
第2図　支援事業(貯水池)計画平面図 …… 2
第3図　調査区の位置と公共座標(S=1/1,000) …… 3
第4図　曽我遺跡周辺の主な遺跡と地形分類図(S=1/40,000) …… 7
第5図　曽我遺跡包蔵地及び調査対象地位置図(S=1/10,000) …… 11
第6節　調査区東壁セクション図(S=1/60) …… 12
第7節　調査区セクション図(S=1/60) …… 13
第8図　遺構配置図(S=1/200) …… 14
第9図　SD1　平面・エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 15
第10図　SD2　平面・エレベーション図(S=1/60) …… 16
第11図　SD10　平面・エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 16
第12図　SX1・2　平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 17
第13図　SX3　平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 17
第14図　SX4・5　平面・エレベーション図(S=1/40) …… 18
第15図　SX6　平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 18
第16図　SX10　平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 19
第17図　SX11　平面(遺物出土状態)・セクション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 20
第18図　SX11　出土遺物実測図(S=1/4・1/3) …… 21
第19図　P1　平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 22
第20図　包含層出土遺物実測図 1(S=1/4) …… 23
第21図　包含層出土遺物実測図 2(S=1/4) …… 24
第22図　「中ノ坪」切図 …… 35
第23図　曽我遺跡周辺の小字図及び復原里(坪)界線(S=1/10,000) …… 36
第24図　高知県の主な官衙関連遺跡(緑釉陶器・陶硯出土)・寺院跡位置図 …… 38

表目次

第1表　ピット状遺構計測表 …… 22
第2表　遺物観察表(土師器・須恵器・緑釉陶器・他) …… 25
第3表　遺物観察表(土製品・石製品・木製品) …… 26
第4表　高知県の主な官衙関連遺跡(緑釉陶器・陶硯)・寺院跡一覧表 …… 39

写真図版目次

巻頭図版　緑釉陶器(SX10)・円面硯(SX11)

図版 1　調査区遠景・調査前風景・調査区東側 遺構検出作業
図版 2　調査区東壁セクション・旧自然流路・SD1 完掘状態・SD2 完掘状態
　　SX3 土錘出土状態・SX11 円面硯出土状態・SX11 遺構掘削作業
図版 3　SX11 遺物出土状態
図版 4　遺構出土遺物（土師器・須恵器・土錘・緑釉陶器）
図版 5　SX11 出土遺物（土師器・須恵器）
図版 6　SX11 出土遺物（土師器・須恵器・石製品・木製品）
図版 7　遺構・包含層出土遺物（土師器・須恵器・土錘・磁器）
図版 8　緑釉陶器

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法

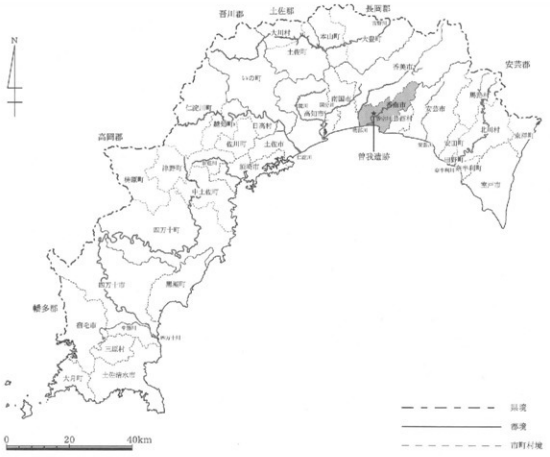
第１節　調査の経緯

本調査は高知県香美郡野市町(現香南市野市町)中ノ村地区の経営体育成緊急支援事業(農業用灌漑施設整備)に伴う記録保存のための緊急発掘調査である。

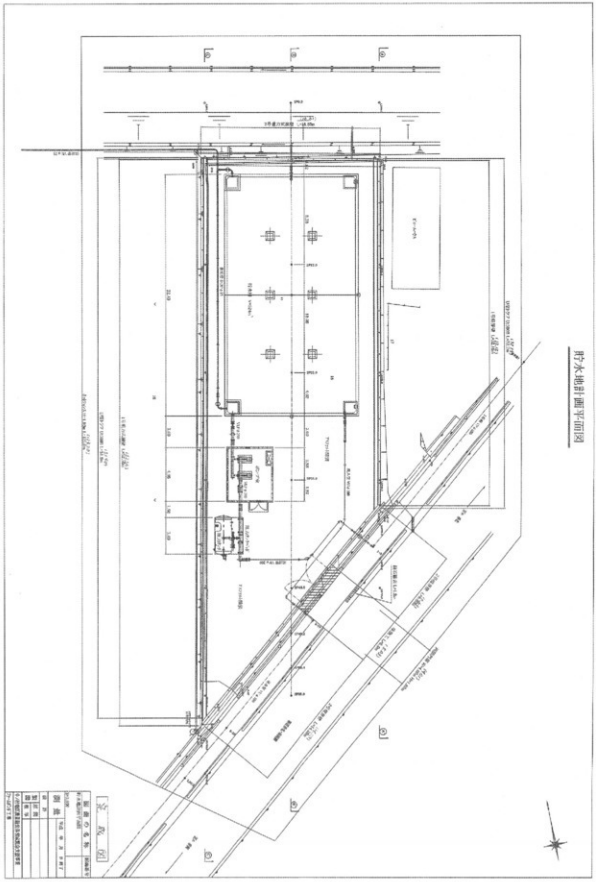
中ノ村地区の経営体育成緊急支援事業の計画に伴い、事前に事業区内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、野市町教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。

試掘調査は平成14年7月8日に行われ、調査面積は16㎡である。調査対象地内に2ヶ所の試掘トレンチを任意に設定し、重機及び手掘りにより遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、遺構の検出はできなかったが、数十点の土師器・須恵器片を出土した。

試掘調査の結果により、比較的良好な遺物包含層が遺存することが判明した。隣接する曽我遺跡と時期・性格等が同じであると考えられることから、同一遺跡として埋蔵文化財包蔵地範囲を拡大し、名称を「曽我遺跡」として本調査を行うこととした。平成14年9月2日から10月3日にかけて、調査対象面積738㎡の内、約500㎡について本発掘調査を実施した。



第１図　香南市及び曽我遺跡位置図



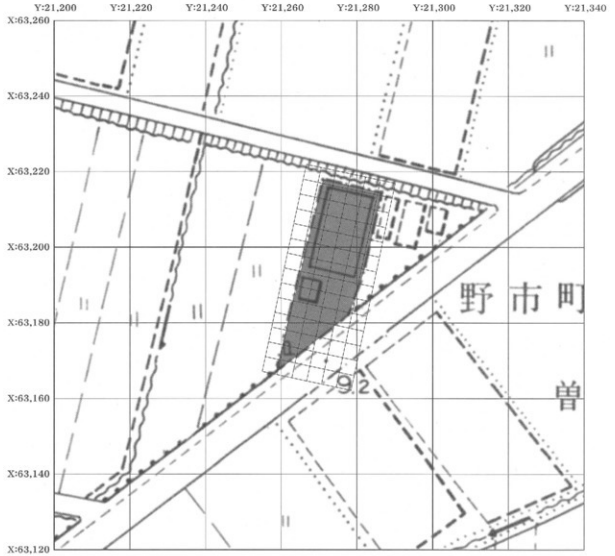
第２図　支援事業（貯水池）計画平面図

第２節　調査の方法

調査対象地について調査区を設定し、排土置場確保のため東・西側に区分して調査した。調査の手順としては、重機を用いて表土(耕作土)を除去した後、包含層掘削・遺構検出・遺構埋土掘削等を手作業で進めた。遺構の調査は全て本発掘調査で行ったものである。尚、調査区西側の遺構番号については便宜上10番台からとなっている。

遺構の測量については、周辺の地割等に則して任意に設定した方向軸に基づいて４ｍの方眼を展開し、グリッド番号を付して地点の記録及び実測を行った。平面実測図及び土層断面図については、縮尺20分の１を基本として測量を行った。

第３図に示した公共座標は世界測地系に則した座標であり、本調査で設定した方向軸は真北より東方向に約12°傾いている。



第３図　調査区位置及び公共座標 (S=1/1,000)

※宗我神社は東北方約 400mの地字「曽我」に鎮座していたが、大正３年（1914）に天正神社と合祀し現在地に遷座。

曽我遺跡周辺の地理・歴史的景観

第Ⅱ章　曽我遺跡周辺(香南市域)の地理・歴史的環境

第1節　地理的環境

曽我遺跡は高知県中央部に拡がる高知平野の東端に位置し、香南市野市町と同香我美町境付近に所在する。

平成18年(2006)4月に旧香美郡の香南5ヶ町村(赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村)が合併し、面積126.5㎢、人口約3万4,000人の香南市が誕生した。市域の西端には高知県二大河川の1つ物部川(延長71㎞)が縦貫し、中央付近及び東側には香宗(大忍)川・夜須川が流れ、これらの河川により形成された扇状地や沖積平野など、下流域には肥沃な平野が拡がっている。平野部には標高100mに満たない低丘陵が点在し、丘陵や自然堤防に沿って集落が散居する里山景観を呈している。

当遺跡の所在する旧野市町は、物部川の左岸に沿って南北約5㎞、東西約4.5㎞の範囲に拡がっている。西は物部川を境として南国市、東は香南市香我美町と隣接し、北は烏ヶ森山系により香美市土佐山田町と分けられる。南は香南市赤岡町、同吉川町と境を接し、南端部より約0.8㎞南で土佐湾に臨む。南部には県都高知市と県東部を結ぶ国道55号線が東西に走っており、高知市からの交通の便も良く、県都のベッドタウンとして人口も年々増加しており、近年発展し続けている。

主要産業としては、江戸時代に野中兼山により灌漑施設が整備され、嘗ては豊富な水を利用した米作の穀倉地帯であったが、現在は近郊型のハウス園芸農業が盛んとなり、京阪神や東京市場に出荷している。

香南市は野市町域を中心に開発・都市化が進行し、高規格道路である南国・安芸道路の建設や、平成14年度(2002)には第3セクターによる鉄道「ごめん・なはり線」が開通するなど、社会資本の整備も進みつつある。一方、市内では「棒踊り」や「手結盆踊り」などの伝統的な祭礼が継承されている地区も多く、民俗文化を次世代に伝える地域社会が残っている。

香南市の南部は太平洋に面する海岸地帯であり、河川下流域には浜堤が形成されている。この浜堤上に発達した集落である赤岡から岸本にかけての海岸は、嘗て製塩業が盛んであった地域であり、赤岡から物部川上流の大栃へ抜ける峠越えの往還路が、現在「塩の道」として整備されている。

香南市の東部、夜須川河口付近にある手結港は、日本最古の掘り込み港である。手結港の東には、地質区分による四万十帯の露頭が観察できる仁吉海岸があり、日本列島の誕生がプレートテクトニクス理論により実証された場所として知られている。

当遺跡の北東には、県内でも有数の温州蜜柑生産地である香我美町山北地区がある。季節風を遮る南西に開く谷状の地形もあって、高知平野の中でも温暖な気候を利用した果樹の生産を盛んに行っている。香南市の平野部は年平均降水量2,276㎜、日照時間2,207時間、年平均気温16.2℃と、高知県内でも温暖で日照時間が長く、降水量は少ない地域である。

自然地理学的には、北東部に聞楽山系の山地と、物部川左岸に拡がる低位段丘砂礫層を呈する野市台地より成っている。この聞楽山系は秋葉山系と烏ヶ森山系の2つから成り、野市町域の約3分の1強の面積を占めている。

秋葉山系は同町の北東に位置する閻魔山(標高368.3m)より南西方向に標高を減じ、町のほぼ中心に位置する三宝山(金剛山 標高265m)の南西方向で野市台地の下に沈む。その秋葉山系の北方に平行して烏ヶ森山系があり、同じく南西に向かって標高を減じて物部川にその山脚を浸食されている。

その山地の下に拡がる野市台地は物部川下流域に発達した古期扇状地であり、海抜約40～10mと北から南へ標高を減じている。この台地は、秋葉山系西端の三宝山山麓部で遮られた物部川旧河道(チャンネル)が東南東へ流下したためできた扇状地性堆積物(砂礫層)によって形成されたものである。また物部川に面した台地の西端部は5mほどの段丘崖となり、下段は新期扇状地と成っている。

物部川が現在の流路を形成したのは中・近世以降のことであり、それ以前に西偏していた複数の旧河道が微地形として残されている。中世になるとそれまで多数存在していた小流路の幾条かが、堆積作用により自然堤防が形成された。近世になって両岸に堤防が築堤され、現在の流路になったと考えられる。物部川の河床が低く、台地への灌漑が容易ではなかったため、近世になるまで原野が拡がっていたが、江戸時代以降の開拓によって耕作地化が進んだ。高知平野の東端に当たり、一般に香長平野と呼ばれる平野の東半を形成する。

当遺跡の西側4.2kmには物部川が、また0.2km西側には香南市東半分の沖積平野を形成する香宗川の支流山北川があり、北側には秋葉山系の尾根が迫る。尾根が平野部に没する山麓から0.8kmほど平野へ下った水田地帯に当遺跡は所在し、古期扇状地の末端部と山北川によって形成された自然堤防との間の谷底(氾濫)平野に立地している。当遺跡から香宗川の河口・海岸線までは約3.4kmで、付近の標高は9～10m前後を測る。

北側の尾根上には仏像構造線が北東―南西の方向性を示して走向しており、当遺跡から見上げる尾根に連なる急斜面は、同地質構造線の断層によって造られたものである。周辺は地帯構造的には四万十帯北帯にあたり、西約1.5kmにある山峰が三宝山で、中生代の地質構造帯「三宝山帯」の名前の由来となった山である。尾根上より北部が秩父帯南帯(三宝山帯)であり、構造線の北側に沿って石灰岩が点在しており、北西約4kmには我が国有数の鍾乳洞として有名な龍河洞が存在する。

古代の掘立柱建物跡を検出した曽我遺跡(1988年度調査)の主要部は、香宗川の右岸、山北川の左岸に所在し、両河川に挟まれた谷底平野に形成された自然堤防上に立地している。山北川は河床勾配が小さく度々氾濫したが、緩やかな流れは用水に至便であり、水運に適した環境であった。

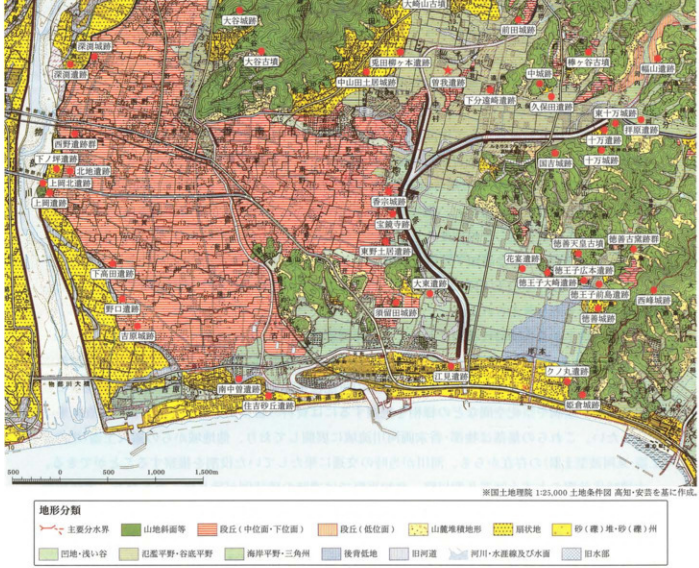
第2節　歴史的環境

曽我遺跡のある香南市野市町は、北部に山塊を背負い南部に平野部が開けている。西は一級河川物部川に隔てられ、東は香宗川以西を中心に市街地が展開している。

物部川は野市町をはじめ、高知平野東部(香長平野)を潤しているが、近世以前においては現在よりも西部を流れており、下流に大小の自然堤防を形成して多くの縄文時代後期以降の遺跡が立地している。その中でも、当遺跡から約6.5km南西に位置する田村遺跡群(1)(南国市)は、弥生時代における南四国最大級の拠点的集落として知られている。

香南市域の遺跡について概観してみると、縄文時代以前の遺跡については実態が明らかにされて

いないのが実情である。有舌尖頭器（草創期）が採集された手結遺跡、後期（宿毛・片粕・松ノ木式）の土器片が確認された拝原遺跡(2)、晩期の貯蔵穴が確認された十万遺跡(3)、晩期末の突帯文土器が採集された深渕遺跡(4)の例が知られているが、貯蔵穴以外は１～数点の断片的な出土状況である。高知平野全域に視野を拡げても、今までは縄文・旧石器の空白地帯といわれるほど縄文時代以前の遺跡の例は僅少であった。近年の調査によって、旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石器文化期・縄文早期にかけての岩陰遺跡である奥谷南遺跡(5)、小型のナイフ形石器が確認された新改西谷遺跡(6)、西日本有数の縄文早期の定住跡を検出した刈谷我野遺跡(7)など、高知平野周辺に縄文時代後期を遡る遺跡の存在が明らかになりつつあり、香南市域から当該期の遺跡が確認される可能性は高いと考えられる。



第４図　曽我遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図（S=1/40,000）

平成20年(2008)、高規格道路建設に伴う発掘調査で、物部川以東で確認例の無かった弥生前期前半の土坑跡が、香宗川下流域の沖積平野微高地に立地する徳王子大崎遺跡[8]で発見された。出土した土器は前期前半の西見当Ⅰ式(畿内Ⅰ様式古段階併行)であり、前期の早い段階でも物部川左岸に集落が展開していたことを示す遺跡として注目されている。

弥生前期末になると、上岡遺跡[9]・北地遺跡・下分遠崎遺跡[10]・拝原遺跡・十万遺跡など集落数は急増する。物部川右岸に所在する弥生時代の拠点的集落田村遺跡群からの分村による集落数の増加だと考えられている。下分遠崎遺跡ではカツオの脊椎骨をはじめツキノワグマ・シカ・イノシシ・イヌなど様々な魚骨・獣骨類や、農工具を含む多様な木製品、また遺構出土の炭化米から熱帯ジャポニカのDNAが検出されるなど、自然科学分析により多くの知見がもたらされた。

下分遠崎遺跡や北地遺跡など幾つかの遺跡では、集落が前期末から弥生中期前半・中葉にかけて継続して営まれるが、前期末のみの短命な遺跡もみられる。香南市域からは中期中葉から後半(Ⅲ様式中段階～Ⅳ様式古段階)にかけての遺跡は殆ど確認されていない。

中期末から後期の初めにかけては、当遺跡の北方約1.3㎞の地点に高地性集落(丘陵性集落)的な要素を持つ木村遺跡[11]が所在している。この遺跡からは竪穴住居跡7棟、段状遺構など当該期の高地性集落の典型的な遺構群と共にガラス製の勾玉も出土している。木村遺跡は標高約30ｍ前後を測る丘陵斜面部に立地しており、土器は凹線文土器が主体である。木村遺跡の北東に連なる山稜上に所在する笹ヶ峰遺跡や、日本屈指の鍾乳洞である龍河洞内で発見された龍河洞遺跡などがほぼ同時期に営まれるなど、周辺一帯の土器の分布状況から当該期には標高の高い地点を利用していたと考えられており、成立の背景として中部瀬戸内地方の影響を受けた可能性が指摘されている。

物部川と香宗川に挟まれた旧野市町域は、青銅器についても注目される地域である。当遺跡の北西0.9㎞の地点には、絵画銅剣で知られる兎田八幡宮があり、約4㎞西方の物部川段丘崖上段には、銅鏡(破鏡)の出土した北地遺跡と、銅矛の再加工品が出土した西野ルノ丸南A遺跡[12](西野遺跡群)が所在する。この段丘崖の下段面からも後期前半の竪穴住居跡(ドノ坪遺跡[13]・上岡遺跡)が確認されており、ドノ坪遺跡からは高知平野最大級の竪穴住居跡1棟から、約80点にものぼるガラス小玉が出土している。段丘崖の上下段に分かれて分布するこれらの遺跡は、弥生後期前半に一連の集落を形成していたものと考えられる。

弥生後期後半から古墳時代初頭にかけては、深渕遺跡・西野遺跡群・東野上居遺跡[14]・幅山遺跡[15]・野口遺跡・南中曽遺跡など集落数も更に増加する。幅山遺跡・深渕遺跡では竪穴住居跡と土器棺墓が確認され、兎田柳ヶ本遺跡[16]では「方形周溝墓」の可能性を残す遺構を検出しているが、当地域において当該期の墓制や祭祀空間などの様相を把握するには資料の蓄積が不十分で、今後の調査結果に期待したい。これらの集落は物部・香宗両河川流域に展開しており、他地域からの搬入土器(庄内式土器・東阿波型土器)の存在からも、河川が当時の交通に果たしていた役割を推察することができる。

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降、高知平野では遺跡の確認例が殆ど無くなるなど、遺跡数急減の可能性が指摘されている。その中で拝原遺跡は古式土師器Ⅲ期(4世紀)の竪穴住居跡が2棟確認されており、県内でも数少ない検出例として注目される。香南市域では初期須恵器の出土は徳王子広本遺跡を除いて確認されておらず、高知平野を通じても前期古墳は殆ど例がみられない。丘陵

先端部に立地していた徳善天皇（花散里）古墳は5世紀代の古墳とされているが、それ以外は6世紀後半以降に築造された後期古墳が大半であり、存在が伝えられるが旧態を存していないものも多い。

大谷古墳[17]・大崎山古墳など発掘調査の実施された古墳もあるが、調査が十分成されておらず、詳細な時期特定のできないものが多い。溝渕山（竹ノ内）古墳や日吉山古墳群・父養寺古墳など野市町佐古地区周辺の丘陵頂部付近に立地するもの、大崎山古墳や池の本古墳・棒ヶ谷古墳など張り出した丘陵に単独で立地するものなどがある。

古墳時代については、4～5世紀前後の様相は殆ど分かっていないが、6世紀後半から7世紀初めにかけての竪穴住居跡が、深渕遺跡とドノ坪遺跡で確認されている。何れも造り付けの竈を持つ住居跡を検出しており、甑が出土している。

古代の遺跡としては、先述のドノ坪遺跡がある。8世紀前葉～9世紀中頃に盛行し、古代の出土遺物は硯や丸鞆、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡などが出土している。コの字状に配置された南四国最大級の規模を持つ総柱建物跡を検出しており、物部川に面した立地から奈良時代から平安時代にかけて川津として機能していた遺跡だと考えられている。深渕遺跡も同様に官衙としての役割を果たしていたと考えられており、二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・陶硯・蛇尾などが出土している。対岸に位置する岩村遺跡群[18]（南国市）からも畿内・近江・東海産の緑釉陶器が出土しており、9世紀後半～10世紀中頃に盛期を求められる。中世には城館（岩村土居城跡）の出現がみられ、長期に亘る拠点として存続した要因として、旧物部川に臨む川津としての水運掌握が背景にあると考えられる。

香宗川流域にも曽我遺跡[19]や十万遺跡など官衙関連と考えられる遺跡が点在している。また条里地割（「香長条里1）の可能性を持つホノギ（中ノ坪・一ノ坪・大坪・四ノ坪など）が随所にみられる。

古代の窯跡として野市町佐古地区周辺に亀山窯跡・アゴデン白岩窯跡、香我美町徳王子に徳善古窯跡群（7世紀後半～8世紀初頭頃）が確認されている。亀山窯跡で作られた瓦は平安京大極殿や、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていた記録が残っており、古代における土佐と中央との関係を知る上で重要な遺構と考えられている。物部川に面して深渕北遺跡[20]が9世紀末～12世紀代にかけて成立していたとみられ、亀山窯跡関連集落の可能性がある母代寺上居屋敷遺跡[21]が近在している。

古代末から中世初頭にかけて各地で荘園の成立がみられ、香美郡内に立荘された大忍庄（荘）は、土佐湾に面した岸本から山間部の奥物部に跨る広大な荘域を有していた。『和（倭）名類聚抄』（10世紀前半頃成立）にみえる大忍郷が荘園化したものと考えられ、鎌倉後期には鎌倉の律宗寺院極楽寺が、次いで南北朝期には紀州の熊野新宮が荘領主となり、15世紀には室町幕府管領で土佐守護でもあった細川氏の所領となるなど、権門による支配の動向が当該地域に影響を与えてきた。

中世には香美郡南部において香宗我部氏の台頭をみる。香宗我部氏は鎌倉時代に中原秋通が香美郡宗我部・深渕両郷の地頭に補任されたのに始まるとされている。地名を氏として宗我部氏を名乗ったが、長岡郡の宗我部（秦）氏と区別するため、郡名を冠して香宗我部氏と称したとする。香宗城を居館とし、室町時代（戦国期）には土佐守護細川氏の権力を背景に大忍庄へ進出するが、安芸氏との抗争で衰退する。長宗我部国親の三男親泰を養子に迎えて局面を打開し、以後長宗我部氏の勢力拡大に貢献する。慶長5年（1600）主家の改易に伴い、地域権力としての香宗我部氏は終焉するが、本流は中山田氏として土佐に家名を残している。現在香宗城跡は八幡社と土塁の一部を残すのみであ

り、その南東には香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡に観音堂が建っている。周辺の遺跡（東野土居遺跡）からは、中世の土師質土器や瓦質土器の他に貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられる。

また香宗川左岸の標高約13ｍ前後を測る丘陵縁辺部の微高地上に立地している十万遺跡では、「重濠複郭式屋敷城」（松本豊寿「城下町の歴史的地理的研究」1967年）と考えられる溝跡を検出している。大忍庄内において名主層などの在地勢力が、構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されており、周辺の中世城郭なども含めて、当該地域が緊張状況下にあった可能性を示唆している。

近世前期になると、物部川山田堰からの分水により原野の拡がる野市台地の開墾が進み、豊かな穀倉地帯へと景観を変えた。上岡北遺跡(22)からは、物部川治水を手がけた野中兼山による築堤と推測される17世紀頃の石積み遺構が確認されている。野市町は西野（東町）周辺に街村集落が形成され、赤岡の町並みと共に民家・商家が発展して香南地域の行政・経済・文化の中心地となり、今日に至る。

【註】

(1)前田光雄・吉成承三 他『田村遺跡群Ⅱ 第1～9分冊』㈶高知県埋蔵文化財センター 2004・2006年
(2)出原恵三『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年
(3)高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年
(4)高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
(5)松村信博・山本純代『奥谷南遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』㈶高知県埋蔵文化財センター 1999・2000・2001年
(6)中山泰弘『新改西谷遺跡・勝楽寺跡』土佐山田町教育委員会 2002年
(7)松本安紀彦『刈谷夫野遺跡Ⅰ・Ⅱ』香北町・香美市教育委員会 2005・2007年
(8)島内洋二『徳王子大崎遺跡』『埋文こうち 第22号』高知県教育委員会 2009年
(9)更谷大介・溝渕真紀『上岡遺跡』野市町教育委員会 2005年
(10)高橋啓明・出原恵三 他『下分遠崎遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』香我美町・香南市教育委員会 1989・1993・2010年
(11)坂本憲昭『本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1993年
(12)更谷大介『西野遺跡群ルノ丸地区南 第二次発掘調査概要報告書』香南市教育委員会 2007年
(13)出原恵三・池澤俊幸・小松大洋 他『ドノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』野市町教育委員会 1997・1998・2000年
(14)筒井三菜・下村　裕「東野土居遺跡 現地説明会資料」㈶高知県埋蔵文化財センター 2010・2011年
(15)岡本　修『幅山遺跡』香我美町教育委員会 1999年
(16)松村信博・宮地啓介「兎田郷ヶ本遺跡』香南市教育委員会 2010年
(17)山本哲也『大谷古墳』㈱高知県文化財団 1991年
(18)二谷民雄『岩村遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』南国市教育委員会 1997・1998・1999年
(19)高橋啓明・吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
(20)吉成承三・佐竹　寛『深渕北遺跡』野市町教育委員会 1996年
(21)松村信博・宮地啓介『母代寺土居屋敷遺跡』香南市教育委員会 2010年
(22)更谷大介・溝渕真紀『上岡北遺跡』香南市教育委員会 2009年

【参考文献】

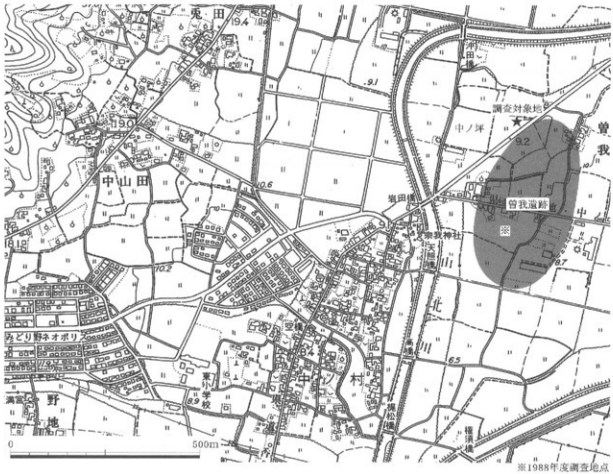
『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992年

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査対象地の概要

曽我遺跡(野市町中ノ村)の調査対象地は、香宗川河口から約3.4㎞に位置しており、香宗川と支流山北川の堆積作用により形成された低平な地形(谷底平野)に立地している。曽我(宗我)地名の語源はス(州・砂)・カ(処)が転じた可能性が指摘されており(1)、砂・粘土などから成る部分の地盤は軟弱である。香宗川(山北川)は平野部における川幅が狭く、蛇行による河床勾配の減少、多数の井堰による堰上げ、災害による地盤沈下等の影響を受け、出水時には水位が上昇し、支流との合流点付近(下地)を中心に度々冠水の被害をもたらした。現在は改修されて一帯は農業が盛行し、対象地の地目は水田及びビニールハウスである。現地表は標高約8.5ｍ前後を測るが、県道(「香北・赤岡線」)を隔てて標高約10ｍ前後を測る微高地(自然堤防)が形成されており、家屋の集住がみられる。

遺跡の所在する中ノ村字曽我には『日本三大実録』貞観10年(868)閏12月21日条にみえる「宗我神社」(式外社)が嘗て鎮座しており、同神社が宗我郷の中心的存在であったことを示す内容が『南路志』に記されている。調査区は県道を挟んで、官衙関連遺跡と考えられている曽我遺跡の包蔵地と近接しており、出土遺物などから同地区に所在する東曽我遺跡を含めた同一遺跡として捉えられている。付近には「中ノ坪」などのホノギが近在しており、条里地割との関連性も考慮される。



第５図　曽我遺跡包蔵地及び調査対象地位置図(S=1/10,000)

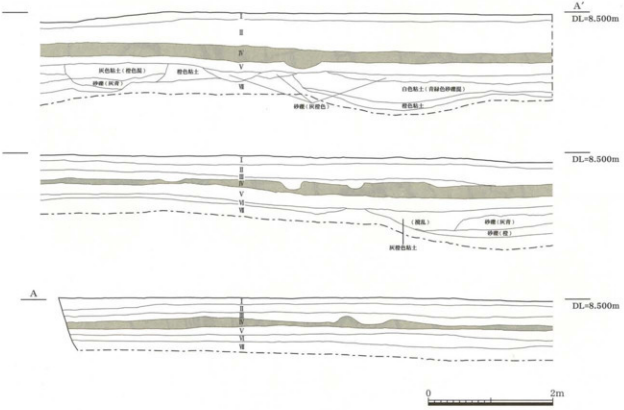
第２節　基本層序

調査区東壁（Ａ－Ａ′）、北壁（Ｂ－Ｂ′）、南壁及び西壁の一部で堆積状況を調査した。ほぼ水平に堆積しており、粘土～シルト層の堆積を確認できた。Ⅳ層は遺物包含層と考えられ、遺構埋土もほぼ黒褐色シルトである。茶灰褐色粘土質土（Ⅴ層）を検出面とし、下層に黄橙色を含む粘土層がみられる。部分的な堆積による層位も確認でき、詳細については各図面を参照されたい。

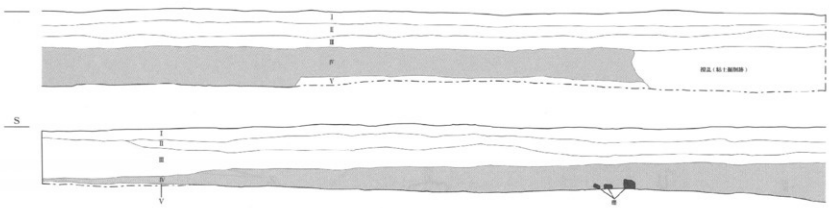
本遺跡の基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　表土（現耕作土）
Ⅱ層　灰黄色シルト　橙色シルトが混じる
Ⅲ層　灰色シルト
Ⅳ層　黒褐色シルト（遺物包含層）
Ⅴ層　茶灰褐色粘土質土
Ⅵ層　黄橙色粘土　1～2㎝大の小礫が混じる
Ⅶ層　白色粘土

調査区東壁 土層堆積状況

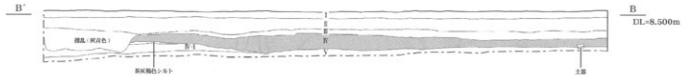


第６図　調査区東壁セクション図（S=1/60）



Ⅰ：表土（耕作土） Ⅱ：灰青色シルト Ⅲ：灰黄色シルト 橙色シルトが混じる Ⅳ：黒褐色シルト Ⅴ：橙色粘土質土

調査区西壁セクション



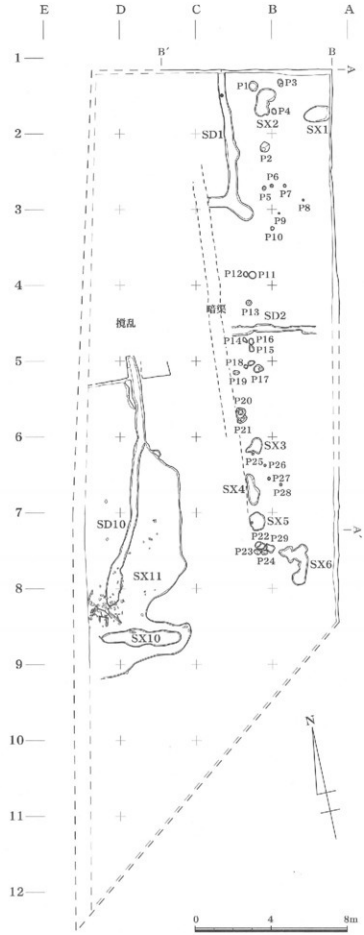
Ⅰ：表土（耕作土） Ⅱ：灰黄色シルト 橙色シルトが混じる Ⅲ：灰色シルト Ⅳ：黒褐色シルト 礫物を含む Ⅳ-1：黒褐色粘土質土 Ⅴ：黄橙色シルト（粘土）

調査区北壁セクション

Ⅰ：表土（耕作土） Ⅱ：灰黄色シルト

調査区南壁セクション

第7図　調査区セクション図（S=1/60）



第 8 図　遺構配置図 (S=1/200)

第3節　遺構と遺物

本調査区で検出した遺構は、溝状遺構3条、性格不明遺構8基、ピット状遺構29個である。不整形な土坑状を呈する遺構を性格不明遺構として調査している。出土した遺物の帰属時期は、殆どが8世紀後半から10世紀中頃の範疇に求められる。

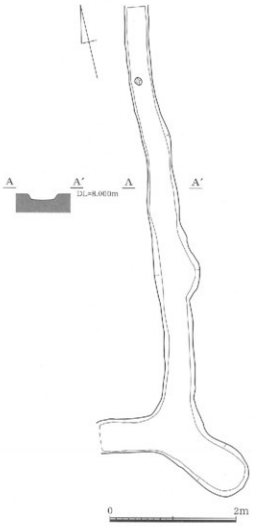
1. 遺構

溝状遺構(SD)

SD1(第9図)

調査区C1～3グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、西端は暗渠に切られ未検出である。検出高は北端で7.88m、西端で7.90mを測る。北端からN-10°-Eで約6.5m直線状に検出し、N-80°-Wに方向を変えて約1.2mで検出を終える。検出規模は6.54(長軸)×0.38～0.78m、床面高は北端で7.85m、西端で7.82mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3～8cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

遺物は口縁・底部を含む土師器片55点と須恵器片4点を出土している。床面から土師器の長胴甕の胴部を出土している。図示したのは土師器の坏の口縁部(1)、皿の底部(2)、須恵器の甕の口縁部(3)である。

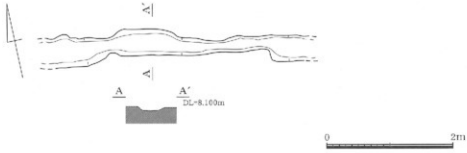


第9図　SD1　平面・エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/4)

SD2(第10図)

調査区B4・C4グリッドに位置する。両端は未検出である。検出高は東端で7.98m、西端で7.92mを測る。検出状態での主軸方向はN-78°-Wである。検出規模は4.18×0.20～0.53m、床面高は東端で7.92m、西端で7.90mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは2～6cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。床面は凹凸状を呈している。

遺物は長胴甕の胴部を含む土師器片9点を出土している。

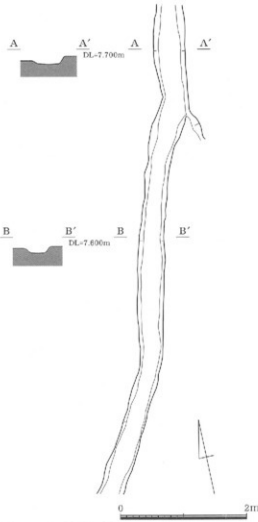


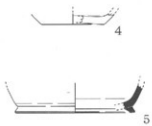
第10図　SD2　平面・エレベーション図(S=1/60)

SD10(第11図)

調査区D4～7・E7グリッドに位置する。北端は撹乱のため未検出である。検出高は北端で7.68m、南端で7.46mを測る。南端からN-22°-Eで8.9m検出し、N-10°-Eに方向を変えて約4.5mで検出を終える。検出規模は13.4×0.38～0.83m、床面高は北端で7.49m、南端で7.42mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4～19cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

遺物は土師器片6点と須恵器片7点を出土している。床面から底部ヘラ切りの土師器の坏(4)と、須恵器の坏の底部(5)を出土している。





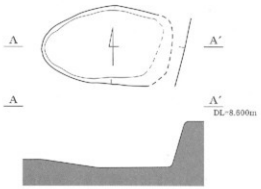
第11図　SD10　平面・エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/4)

性格不明遺構(SX)

SX1(第12図)

調査区 B1グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は 8.03 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.38 m (検出長)、短径 0.83 m、深さ5㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。

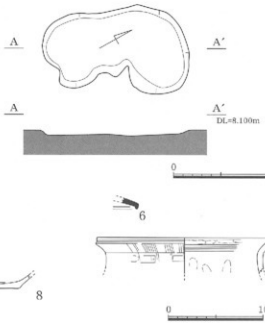
遺物は土師器片 28 点、須恵器片 3 点を出土している。図示したのは須恵器の蓋(6)である。



SX2(第12図)

調査区 B1・C1グリッドに位置する。検出高は 7.92 m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.54 m、短径 0.78 ～ 0.99 m、深さ4㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から切り合い関係の可能性も考えられる。

遺物は口縁・底部(ヘラ切り)を含む土師器片65点、須恵器片 1 点、布目瓦片 1 点を出土している。土師器片は長胴甕の細片が含まれている。図示したのは土師器の皿(7・8)、甕の口縁部(9)である。



第 12 図 SX1・2 平面・エレベーション図 (S=1/40)　出土遺物実測図 (S=1/4)

SX3(第13図)

調査区 C6グリッドに位置する。検出高は 7.75 m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 0.81 m、短径 0.71 m、深さ 7㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。

遺物は土師器片 4 点、須恵器片 1 点と有溝土錘(10)を出土している。

第 13 図 SX3 平面・エレベーション図 (S=1/40)　出土遺物実測図 (S=1/4)

SX4(第14図)

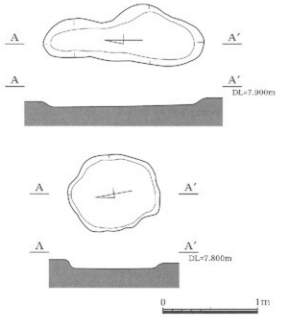
調査区C6グリッドに位置する。検出高は7.76mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径1.69m、短径0.41～0.62m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

遺物は土師器片9点を出土している。

SX5(第14図)

調査区C7グリッドに位置する。検出高は7.71mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.97m、短径0.82m、深さ9cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

遺物は土師器片10点を出土している。

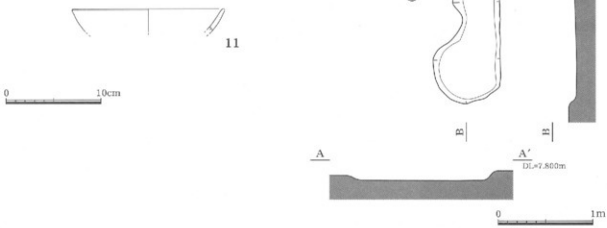


第14図 SX4・5 平面・エレベーション図(S=1/40)

SX6(第15図)

調査区B7グリッドに位置する。検出高は7.65mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径2.17m、短径0.72～1.56m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

遺物は土師器片34点、須恵器片4点を出土している。図示したのは土師器の椀の口縁部(11)である。

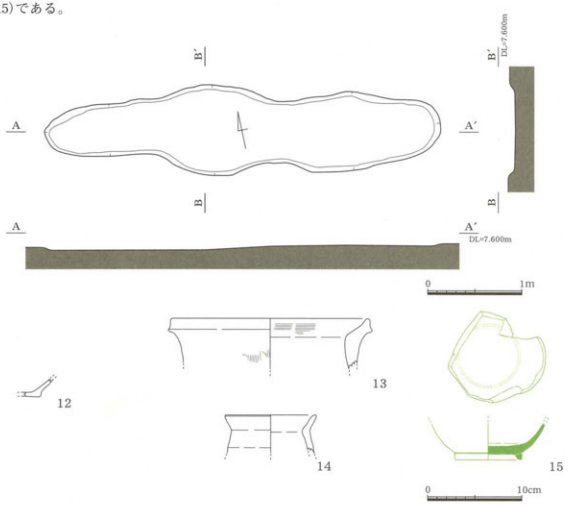


第15図 SX6 平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4)

SX10(第16図)

調査区 D8･E8グリッドに位置する。検出高は 7.48ｍを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径 3.99ｍ、短径 0.60～0.96ｍ、深さ 3 ㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。浅い落込み状を呈して SX11 内から検出しており、同一遺構の可能性が考えられる。

遺物は口縁･底部(ヘラ切り)を含む土師器片 113 点、須恵器片 23 点を出土している。土師器片の多くは摩耗している。図示したのは土師器の坏の底部(12)、甕の口縁部(13･14)、緑釉陶器の椀の底部(15)である。



第 16 図 SX10 平面･エレベーション図 (S=1/40)　出土遺物実測図 (S=1/4)

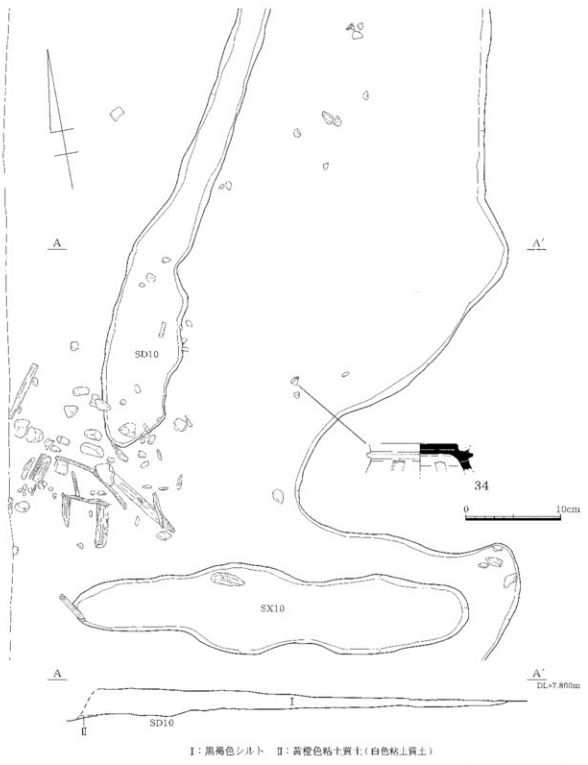
SX11(第16図)

調査区 D6～9･E7～9グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は 7.53～7.60ｍを測る。平面形態は不整形状を呈し、検出規模は 12.7 × 5.3ｍ、深さは 2～16㎝を測る。断面形態はなだらかな落込み状地形の観を呈している。

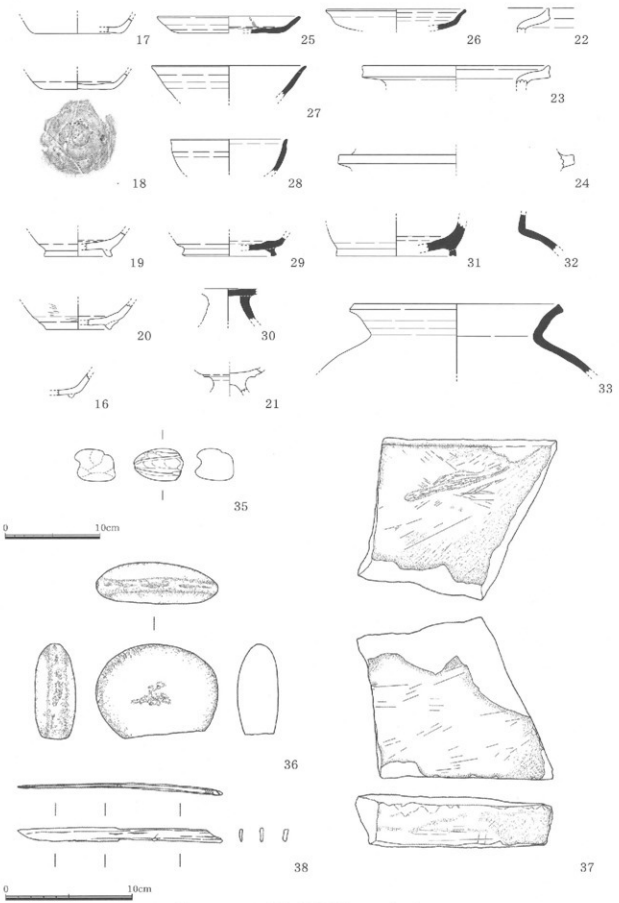
遺物は口縁･底部(ヘラ切り)を含む土師器片 337 点、須恵器片 62 点、土錘 1 点を出土している。土師器片は長胴甕の細片が含まれており、赤色塗彩を施した遺物も少量ながら出土している。また桃核と考えられる種実遺体を 13 個出土している。図示したのは土師器の皿(16)、坏の底部(17･18)、椀の底部(19･20)、高坏の脚部(21)、甕の口縁部(22･23･24)、須恵器の皿(25･26)、坏の底部(27)、椀

の口縁部(28･29)、高坏の脚部(30)、壺の底部(31)、甕の口縁部(32･33)、円面硯(34)、土錘(35)、叩石(36)、砥石(37)、刀子形の木製品(38)である。

落込み部からは遺物と共に板材と15～30cm大の礫を多く検出している。祭祀具と考えられる木製品や桃核等の種実遺体の出土がみられるなど、儀礼に関わる遺構の可能性を含んでいる。



第17図 SX11 平面（遺物出土状態）･セクション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4)



第 18 図 SX11 出土遺物実測図 (S=1/4・1/3)

ピット状遺構(P)

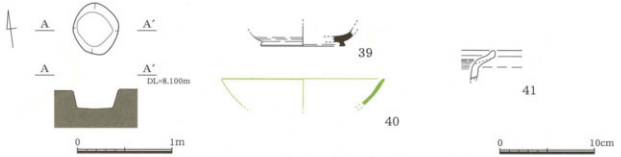
ピット状遺構は30個近くを検出したが、企画性(掘立柱建物跡等)は認められなかった。深さが10㎝未満(平均8㎝前後)を測るものが多く、調査区東側に不整形な帯状に検出している。

遺物は土師器・須恵器片1～数点を出土しているが、小規模な遺構を中心に遺物が確認されないものもある。図化し得たのはP3から出土した土師器の甕の口縁部(41)である。

P1(第19図)

調査区C1グリッドに位置する。検出高は7.94ｍを測る。平面形態は円形状を呈し、長径56㎝、短径48㎝、深さ20㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。

遺物は土師器片21点、須恵器片2点を出土している。図示したのは須恵器の坏の底部(39)、緑釉陶器の椀の口縁部(40)である。



第19図　P1平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/4)

遺構番号	形態	規模			検出高(m)	切合関係	遺構位置(グリッド)	出土遺物	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)					
P1	円形状	0.56	0.48	0.20	7.942		C1	土師器片21点 須恵器片2点	緑釉陶器片を出土
P2	不整形状	0.53	0.46	0.29	8.002		C2	土師器片6点 須恵器片1点	
P3	楕円形状	0.42	0.26	0.12	7.936		B1	土師器片7点	ピット状の落ち込みを有する
P4	楕円形状	0.32	0.25	0.02	7.935		B1	土師器片1点	
P5	円形状	0.24	0.20	0.09	7.919		C2	—	
P6	円形状	0.18	0.18	0.07	7.924		C2･B2	—	
P7	円形状	0.17	0.16	0.12	7.935		B2	—	
P8	円形状	0.11	0.11	0.06	7.947		B2	—	
P9	円形状	0.11	0.09	0.06	7.936		B3	—	
P10	円形状	0.21	0.18	0.03	7.930		C3･B3	—	
P11	円形状	0.40	0.39	0.04	7.944		C3	—	
P12	楕円形状	0.28	0.25	0.04	7.938		C3	—	
P13	円形状	0.31	0.29	0.11	7.937		C4	—	
P14	不整楕円形状	0.32	0.18	0.05	7.922		C4	—	
P15	不整楕円形状	0.38	0.28	0.03	7.912		C4	土師器片2点	長胴甕の口縁部出土
P16	楕円形状	0.35	0.26	0.03	7.929		C4	—	
P17	不整楕円形状	0.53	0.44	0.08	7.888		C5	土師器片1点	ピット状の落ち込みを有する
P18	方形状	0.20	0.19	0.04	7.893		C5	土師器片3点	
P19	楕円形状	0.32	0.21	0.06	7.860		C5	土師器片7点	
P20	不整形状	(0.53)	(0.50)	0.08	7.794	P21	C5	土師器片10点	ピット状の落ち込みを有する
P21	楕円形状	0.54	(0.28)	0.06	7.772	P20	C5		ピット状の落ち込みを有する
P22	楕円形状	0.52	0.38	0.12	7.660		C7	—	段部を有する
P23	楕円形状	0.36	0.27	0.08	7.656		C7	土師器片1点	
P24	楕円形状	0.32	0.24	0.12	7.650		C7	須恵器片1点	
P25	円形状	0.13	0.11	0.03	7.745		C6	—	
P26	円形状	0.13	0.13	0.04	7.760		C6	—	
P27	円形状	0.16	0.16	0.04	7.753		C6	—	
P28	円形状	0.16	0.14	0.06	7.723		B6	—	
P29	不整形状	0.56	0.45	0.06	7.647		C7･B7	土師器片1点 須恵器片1点	

第1表　ピット状遺構計測表

2. 包含層出土遺物

本調査区ではⅣ層(黒褐色シルト)を中心に口縁・底部を含む土師器片約900点、須恵器片約100点を出土している。土師器片は長胴甕(煮炊具)の細片が含まれている。また粘土採掘坑跡とみられる撹乱から、須恵器の双耳瓶と緑釉陶器の底部を出土している。

土師器

坏

図示したのは1点である。43は外面にヨコナデ調整を施しており、底部はヘラ切り後、ナデ消している。体部は外傾して立ち上がる。

43

甕

図示したのは1点である。44は口縁部内外面にヨコハケを施しており、口縁部は屈曲している。口唇部は凹状を成して、端面は下方に若干拡張している。

44

甑

甑は1点を出土している。45は把手部であり、指押さえで成形している。全体的に磨耗がみられる。

45

須恵器

坏蓋

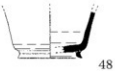
図示したのは1点である。46は内面にヨコナデ調整を施しており、擬宝珠形の摘みが付いている。

46

坏

図示したのは2点である。47は内面にヨコナデ調整を施しており、体部は斜め上方へ直線的に立ち上がる。底部外面やや内側に外傾する貼付高台を有している。48は内外面にヨコナデ調整を施しており、体部は僅かに外反気味に立ち上がる。底部外縁に断面台形状の貼付高台を有している。

47


48

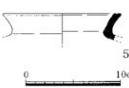
壺

図示したのは1点である。49は内外面にヨコナデ調整を施しており、底部外縁端部に外傾する貼付高台を有している。

49

甕

図示したのは1点である。50は口縁部内外面にヨコナデ調整を施している。肩部から直口気味に外傾し、口唇部は凹状を成している。肩部内面に同心円状の当具痕が認められる。



第20図 包含層出土遺物実測図 1(S=1/4)

硯(転用硯)

転用硯は1点を図示している。51は内外面にヨコナデ調整を施しており、底部外縁端部に外傾する貼付高台を有している。底部内面端部は僅かな凹状を呈して周溝状を成している。同面は平滑で硯としての転用が認められ、坏部は打ち欠いた可能性が考えられる。

双耳瓶(壺)

52は内面にヨコナデ調整を施している。耳部は貼付で円孔を穿ち、面を取っている。※遺物の傾きについては検討を要する。

緑釉陶器

椀

53は削り出し(蛇の目)高台から内彎気味に立ち上がり、体部外面に1条の沈線がみられる。底部外底を除いて施釉している。洛西産(9世紀前半～)の可能性が考えられる。

青磁

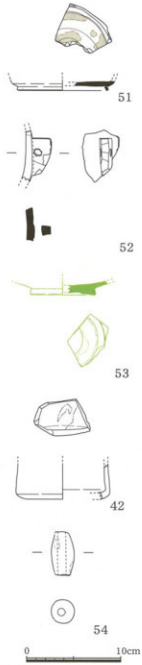
香炉

42は筒型の低脚香炉と考えられる(2)。脚部が欠損しており、図示し得ていない。中世の貿易陶磁器とみられ、Ⅲ層から出土している。

土製品

土錘

54は管状土錘である。芯を用いて成形し、両端は面を取っている。側部に圧痕が認められる。



第21図 包含層出土遺物実測図 2(S=1/4)

包含層出土遺物の概要については以上である。42･45を除いて中心となる時期は8世紀後半から10世紀中頃の範疇に求められ、検出した遺構の帰属時期も概ね当該期に比定されると考えられる。

【註】

(1)『地名用語語源辞典』東京堂出版 1983年 ※他に蘇我氏の部曲の系譜を引くとみる説もある。

(2)吉成承三氏の御教示による。

第2表　遺物観察表(土師器・須恵器・緑釉陶器・他)

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm)			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径			
1	SD1	土師器	坏	17.0	(2.6)	—	内)浅黄 外)浅黄	精選された胎土。内外面ヨコナデ。口縁部は比較的直線的に立ち上がる。口縁端部は外反し、口唇部は丸く収める。	
2	SD1	土師器	皿	—	(2.0)	8.8	内)にぶい黄橙 外)にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。火山ガラスを少量含む。内外面ヨコナデ。底部外縁端部に足高の高台を有し、端部は面を成す。底部分割成形。	
3	SD1	須恵器	甕	21.2	(3.0)	—	内)褐灰 外)褐灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
4	SD10	土師器	坏	—	(1.2)	6.6	内)浅黄 外)浅黄	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部ヘラ切り。体部は僅かに外反気味に立ち上がる。	底部内面に若干の煤け
5	SD10	須恵器	坏	—	(3.2)	12.6	内)灰白 外)灰	細・粗粒砂を含む。体部は内彎気味に立ち上がる。底部外縁端に外傾する貼付高台。端面は僅かに凹状を成す。	
6	SX1	須恵器	坏蓋	—	(1.2)	—	内)灰 外)灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。端部は外面に稜をもって屈曲し、外面は面を成す。	
7	SX2	土師器	皿	15.8	(1.3)	12.3	内)にぶい黄橙 外)にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は開き気味に成形する。	
8	SX2	土師器	皿	-	(1.4)	9.6	内)灰白 外)灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。体部は外反して立ち上がる。	全体的に磨耗している
9	SX2	土師器	甕	18.4	(3.8)	—	内)にぶい黄橙 外)灰黄褐	赤色チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は「く」字形に屈曲し、口唇部は凹状を成す。上端部は垂直気味にやや尖る。口縁・胴部境に1条の沈線。口縁部外面はタテハケ後ナデ消す。上胴部外面はヨコハケ後ナデ消す。口縁部内面にヨコハケ。上胴部内面に指押さえ。	
11	SX6	土師器	椀	14.2	(2.4)	—	内)灰白 外)灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸く収める。	
12	SX10	土師器	坏	—	(1.9)	—	内)浅黄 外)にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。平底から斜上外方に外反しながら立ち上がる。	全体的に磨耗している
13	SX10	土師器	甕	20.6	(5.4)	—	内)灰褐 外)灰褐	細・粗粒砂を含む。口縁部は「く」字形に屈曲し、口唇部は凹状を成す。端面は下方に若干拡張される。上胴部外面にタテハケ。口縁部内面にヨコハケ。	内面に若干の煤け
14	SX10	土師器	甕	9.6	(4.0)	—	内)にぶい黄橙 外)にぶい黄橙	赤色チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。口縁部は「く」字形に屈曲。口縁部に指押え。口唇部は丸く収める。	搬入品の可能性
15	SX10	緑釉陶器	椀	—	(4.0)	7.0	内)オリーブ灰 外)オリーブ灰	精選された胎土。砂粒は殆ど含まない。全面施釉。内外面ヨコナデ。体部は内彎して立ち上がる。見込みに沈線状の圏線。底部外縁端部に貼付高台。高台畳付は凹状の段を成す(有段輪高台)。	近江産(10世紀後半代)の可能性
16	SX11	土師器	皿	—	(2.6)	—	内)赤褐色 外)灰黄	精選された胎土。高台は底部外縁端部に外傾し、断面形で基部に比して端部が細い。	内面に赤色塗彩を施す
17	SX11	土師器	坏	—	(1.7)	9.0	内)浅黄 外)にぶい黄橙	精選された胎土。底部ヘラ切り後、ナデ消す。内外面ヨコナデ。体部は外反して立ち上がる。	
18	SX11	土師器	坏	—	(1.7)	7.5	内)浅黄 外)浅黄	精選された胎土。内面ヨコナデ。底部ヘラ切り。体部は緩やかに立ち上がる。	
19	SX11	土師器	椀	—	(3.1)	7.0	内)灰黄 外)灰	細・粗粒砂を含む。外面ヨコナデ。体部は僅かに内彎気味に立ち上がる。底部外縁端部に外傾する貼付高台。	器表の荒れが激しい。摩耗
20	SX11	土師器	椀	—	(2.7)	6.8	内)にぶい黄橙 外)灰黄褐	細・粗粒砂を含む。底部外縁端部に貼付高台。断面形で基部に比して端部が細い。貼付部で段を有する。	器表の荒れが激しい。摩耗
21	SX11	土師器	高坏	—	(2.6)	—	内)浅黄 外)黄灰	精選された胎土。杯部境に段を有する。	全体的に磨耗している
22	SX11	土師器	甕	—	(2.3)	—	内)にぶい褐 外)にぶい褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は屈曲し、口唇部は凹状を成す。端部は摘み上げられ、断面は三角形状に尖る。口縁部内外面ヨコナデ。	
23	SX11	土師器	甕	19.6	(2.0)	—	内)にぶい黄橙 外)にぶい黄橙	赤色チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は屈曲し、口唇部はハケ状原体による凹状を成す。端部は摘み上げられ、下端断面は三角形状を呈する。口縁部内外面ヨコナデ。	
24	SX11	土師器	甕	—	(1.8)	—	内)にぶい黄橙 外)にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面にヨコハケ。断面台形状の鍔が付き、粘土接合帯を認める。鍔端部は僅かに凹状を成す。	摂津型
25	SX11	須恵器	皿	15.0	1.8	10.5	内)灰 外)灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。平底状の底部から僅かに外反して立ち上がる。口唇部は丸く収める。	内外面に火襷あり
26	SX11	須恵器	皿	14.6	(2.2)	—	内)灰 外)灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部が屈曲し、内面が僅かに凹状を呈する。	
27	SX11	須恵器	坏	16.4	(3.5)	—	内)黄灰 外)黄灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。口縁端部は外反し、口唇部は丸く収める。	
28	SX11	須恵器	坏	12.2	(3.5)	—	内)灰白 外)灰白	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は内彎気味に立ち上り、口縁部は強いヨコナデにより凹状を成す。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。	
29	SX11	須恵器	坏	—	(2.1)	—	内)灰 外)灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は斜め上方へ直線的に立ち上がる。底部外縁やや内側に外傾する貼付高台。	
30	SX11	須恵器	高坏	—	(3.8)	—	内)灰白 外)灰白	外面タタキ痕をナデ消す。脚部は「ハ」字形に開く。焼成不良。	全体的に磨耗している

図版番号	出土地点層位	種類	器形器部	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
31	SX11	須恵器	壺	—	(3.6)	12.6	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は僅かに内傾気味に立ち上がる。底部外縁端部に貼付高台。高台端面は僅かに凹状を成す。	
32	SX11	須恵器	壺	—	(3.9)	—	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面にタタキ痕→タテハケ。体部内面の同心円状の当具痕を弱くナデ消す。	
33	SX11	須恵器	壺	21.6	(7.4)	—	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面にタタキ痕→ヨコハケ。体部内面の同心円状の当具痕をナデ消す。	
34	SX11	須恵器	円面硯	—	(3.0)	—	内）灰 外）灰白	陸部は台形状に立ち上がる。海部ヨコナデ。脚部に透かしを有する。	透脚硯
39	P1	須恵器	坏	—	(2.1)	9.0	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は斜直して立ち上がる。高台は底部外縁から外方へ都張し、端面は凹状を成す。	
40	P1	緑釉陶器	椀	17.2	(2.9)	—	内）灰 外）灰	須恵器に施釉。内外面ヨコナデ。口縁部は外傾しながら立ち上がり若干の稜を持つ。端部は薄やかに外反し丸く収める。釉は暗緑色。	
41	P3	土師器	甕	—	(3.2)	—	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は肥厚し、口唇部は面を取る。内面ヨコハケ。	
42	包含層 最層	青磁	香炉	—	(3.8)	—	内）灰白 外）明オリーブ灰	胎土の状態良好。釉の発色良好。	貿易陶磁器
43	包含層 下層	土師器	坏	—	(1.9)	8.0	内）黄褐色 外）にぶい黄橙	精選された粒土、外面ヨコナデ、底部へら切り後、ナデ調す。体部は外傾して立ち上がる。	
44	包含層 下層	土師器	甕	25.2	(2.6)	—	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は肥厚し、口唇部は面取を成す。端面は下方に若干垂下される。口縁部内外面ヨコナデ。	
45	包含層 下層	土師器	鉢	—	(3.1)	—	内）灰白 外）灰白	把手部。指押さえで成形。	全体的に摩耗している
46	包含層 下層	須恵器	坏蓋	—	1.9	—	内）灰白 外）灰白	細・粗粒砂を含む。内面ヨコナデ。擬宝珠形の摘みが付く。	自然釉が若干かかる
47	包含層 下層	須恵器	坏	—	(5.0)	6.8	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。内面ヨコナデ。体部は斜め上方へ直線的に立ち上がる。底部外面やや内側に外傾する貼付高台。	
48	包含層 下層	須恵器	坏	13.9	4.0	9.3	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は僅かに外反気味に立ち上がる。底部外縁に断面台形状の貼付高台。	
49	包含層 下層	須恵器	壺	—	(1.5)	9.0	内）灰 外）灰	内外面ヨコナデ。底部外縁端部に外傾する貼付高台。	
50	包含層 下層	須恵器	壺	12.5	(2.9)	—	内）灰白 外）灰白	細・粗粒砂を含む。口縁部は内外面ヨコナデ。胴部から直口気味に外傾し、口唇部は面状を成す。胴部内面にタタキ痕が残る。	
51	包含層 下層	須恵器	転用硯	—	(1.2)	9.7	内）黄灰 外）黄灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。体部は直線的にやや上がる。底部外縁端部に外傾する貼付高台。底部内面端部は僅かな回転を呈す。底部内面を硯として転用か。	坏部を打ち欠いた可能性
52	撹乱	須恵器	双耳瓶	—	(5.6)	—	内）灰白 外）灰白	内面ヨコナデ、耳部貼付。耳部に円孔を穿ち、血を取る。	
53	撹乱	緑釉陶器	椀	—	(1.5)	6.8	内）オリーブ灰 外）オリーブ灰	削り出し（蛇の目）高台から内湾気味に立ち上がる。体部外面に1条の沈線。底部外弦を除き施釉。	透明釉（貫入あり）の可能性

第3表　遺物観察表（土製品・石製品・木製品）

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 全長	全幅	全厚	重量	色調	特徴	備考
10	SX3	土製品	土錘	5.8	4.3	4.1	85.0g	内） 外）にぶい黄橙	細・粗粒砂を含む。2条の溝を有する。両断面はU字形を呈する。指頭圧痕が認められる。	部分的に残る有溝土錘
35	SX11	土製品	土錘	(5.5)	(3.4)	(4.0)	(85.0g)	内） 外）にぶい黄橙	赤色チャート等の細・粗粒砂を含む。2条の溝を有する。断面形はU字形を呈する。指頭圧痕が認められる。	有溝土錘
36	SX11	石製品	砥石	9.6	7.2	3.2	342.0g		側面及び平坦面に敲打痕、砂岩。	
37	SX11	石製品	凹石	15.6	12.8	4.2	1174.0g		3面に擦痕、砂岩。	
38	SX11	木製品	刀子形	16.4	1.2	0.4			鏃表を整形。	祭祀具の可能性
54	包含層 下層	土製品	土錘	4.7	2.5	孔径 0.9	25.0g	内） 外）淡黄	チャート・黒色粒の細・粗粒砂を含む。火山ガラスを少量含む。芯を用いて成形。両端は面を取る。側部に圧痕が認められる。	管状土錘

第Ⅳ章　総括

第１節　曽我遺跡出土の古代土器と遺跡の性格

古代の掘立柱建物跡などを検出した曽我遺跡[1]の主要部は、香宗川と支流山北川に挟まれた自然堤防(段丘下位面)上に立地しており、本調査区はその周縁端部にあたる谷底平野に所在している。

調査区は北側から南側にかけて除々に検出高を減じ、南西端に位置するSX10･11付近では比高差約50㎝前後を測る。当遺跡に近傍して山北川の旧河道(埋没河川)が所在しており、周辺は類水地形(高水敷･湿地など)であった可能性を示唆している。SX11は西側に向かってなだらかな落込み状地形を呈しており、出土した遺物などから水辺に関する祭祀空間であった可能性が考えられる。

河川に臨む立地や旧類水地形周辺から、祭祀(古墳～古代)に関する遺物が出土する例は全国的にみられ、香南地域においても徳王子前島遺跡[2]や近接する同広本遺跡(Ⅰ区)、花宴遺跡(Ⅳ区)[3]などでも確認されている。これらの遺跡は海岸平野や後背低地が拡がる香我美町徳王子の埋積浅谷などに立地しており、現在は岸本川や大留川などの小河川が姿を変えて南流している。徳王子広本遺跡[4]ではそれらを臨む段丘低位面の残丘緩斜面上に、古代～中世(前期)にかけての集落跡を検出している。更に後背の丘陵には徳善天皇(花散里)古墳や徳善古窯跡群などが存在している。上述の遺跡群は何れも高規格道路(南国･安芸道路)建設に伴う発掘調査(平成17～21年度)で発見されており、調査報告書は未刊行(2010年11月現在)であるため詳細については後考に待ちたい。

高知県内において水辺に伴う古代の主な祭祀関連遺跡として、県西部(幡多郡)に所在する風指遺跡[5](四万十市)や、高東平野西端部(高岡郡)に所在する西鴨地遺跡[6](土佐市)などが挙げられる。

本調査で得られた出土遺物や検出遺構は、質･量共に充分ではなく、遺跡の性格について明確な位置付けを行なうことは困難であるが、県内外の遺跡との比較検討を行い、若干の考察を試み総括としたいと考える。尚、遺物の分類については遺構出土の遺物が僅少であり、図化し得た特徴的な遺物を概観するに留め、土器様相のまとめとしたい。

時期区分については、池澤俊幸氏(高知県埋蔵文化財センター)の編年試案を参考とした。

(1)　土師器

土師器は皿、坏、椀、高杯、甕を出土している。供膳具に関しては殆どが回転台成形で、底部ヘラ切りを製作手法の基調としている。煮炊具に関しては長胴型を呈したものを中心に出土している。

皿

皿は4点(2･7･8･16)を図化している。2(第9図)は底部外縁端部に足高の高台を有しており、分割成形と考えられる。7･8(第12図)は内外面にヨコナデ調整を施しており、体部は外反しながら立ち上がる。7は口縁部を開き気味に成形しており、口径は約16㎝を測る。Ⅱ-2･3期(9世紀後半～10世紀前半頃)に比定されると考えられる。16(第18図)は断面形で基部に比して端部が細い高台を有し、外面に赤色塗彩を施している。祭祀遺構の可能性が考えられるSX11から出土している。

坏

坏は5点(1·4·12·17·18)を図化している。1(第9図)の口縁部は比較的直線的に立ち上がり、端部は外反して口唇部は丸く収める。4(第11図)·12(第16図)は内外面にヨコナデ調整を施しており、4は体部が僅かに外反気味に立ち上がり、12は平底から斜上外方に外反しながら立ち上がる。17·18(第18図)は内外面にヨコナデ調整を施しており、底部はヘラ切りである。17は底部ヘラ切り後、ナデ消している。12はⅡ期(9世紀中葉～10世紀前半頃)に属する底部形態と考えられる。

椀

椀は3点(11·19·20)を図化している。11(第15図)の口縁部は内彎気味に立ち上がり、口唇部は丸く収める。19(第18図)の体部は僅かに内彎気味に立ち上がり、底部外縁端部に外傾する貼付高台を有している。20(第18図)は底部外縁端部に断面形で基部に比して端部が細くなる貼付高台で、接合部に段を有している。

高坏

高坏は1点(21)を図化している。21(第18図)は坏部境に段を有している。

甕

甕は7点(9·13·14·22·23·24·41)を図化している。9(第12図)·13(第16図)の口縁部は「く」字形に屈曲し、口唇部は凹状を成している。9の上端部は垂直気味にやや尖り、13の端面は下方に若干拡張している。22·23(第18図)の口縁部は屈曲し、口唇部は凹状を成している。端部は摘み上げられ、断面は三角形状を呈している。41(第19図)の口縁部は屈曲し、口唇部は面を取っている。これらは何れも外面タテハケ·内面ヨコハケ調整を基調とする長胴甕の口縁部であり、復元し得なかったが、出土遺物の中に多くの胴部が含まれている。また24(第18図)は羽釜(摂津型)と考えられる断面台形状の鍔部であり、粘土接合帯が認められる。14(第16図)は小型の甕と考えられる。内外面にヨコナデ調整を施しており、口縁部は「く」字形に屈曲し、指押さえによる成形がみられる。口唇部は丸く収める。当遺物は搬入品の可能性を含んでいる(7)。

全体的にⅡ期の範疇に帰属すると考えられるが、出土遺物における土製煮炊具の割合は、比較的多い印象を受ける。

(2)　須恵器

須恵器は皿、坏蓋、坏、高坏、壺、甕、硯(円面硯)を出土している。

皿

皿は2点(25·26)を図化している。25(第18図)は平底状の底部から僅かに外反して立ち上がり、口唇部は丸く収める。内外面に火襷が認められる。26(第18図)の体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部が屈曲し、内面は僅かに凹状を呈している。

坏蓋

坏蓋は1点(6)を図化している。6(第12図)の端部は外面に稜を持って屈曲し、面を成している。

坏

坏は5点(5･27･28･29･39)を図化している。5(第11図)の体部は内彎気味に立ち上がり、底部外縁端部に外傾する貼付高台を有し、端面は僅かに凹状を成している。27(第18図)の口縁部は外傾気味に立ち上がり、口縁端部は外反して口唇部は丸く収める。28(第18図)の体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は強いヨコナデ調整により凹状を成している。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。29(第18図)の体部は斜め上方へ直線的に立ち上がり、底部外縁やや内側に外傾する貼付高台を有している。39(第19図)の体部は斜直して立ち上がり、高台は底部外縁から外方へ拡張し、端面は凹状を成している。

高坏

高坏は1点(30)を図化している。30(第18図)の脚部は「ハ」字形に開いている。焼成は不良で、全体的に磨耗している。

壺

壺は1点(31)を図化している。31(第18図)の体部は僅かに内彎気味に立ち上がる。底部外縁端部に貼付高台を有し、高台端部は僅かに凹状を成している。

甕

甕は3点(3･32･33)を図化している。何れもヨコナデ調整を施している。32･33(第18図)は体部外面のタタキ痕にヨコハケを施しており、内面の同心円状の当具痕をナデ消している。

硯

硯は1点(34)を図化している。34(第17図)は円面硯である。陸部は台形状に立ち上がり、海部はヨコナデを施している。脚部に透かしを有している。SX11の肩部から出土している。

(3)　緑釉陶器

緑釉陶器(椀)は2点(15･40)を図化している。15(第16図)は精選された胎土で砂粒を殆ど含まない。内外面にヨコナデ調整を施しており、体部は内彎して立ち上がる。見込みに沈線状の圏線が認められる。底部外縁端部に貼付高台を有し、高台畳付は凹状の段を成している(有段輪高台)。全面に施釉している。近江産(10世紀後半代)の可能性が考えられる。SX11と同一遺構の可能性が考えられるSX10から出土している。40(第19図)は須恵器に施釉しており、釉は暗緑色である。口縁部は外傾しながら立ち上がり若干の稜を持つ。端部は僅かに外反して丸く収める。

(4)　土製品

土製品は包含層出土遺物を含めて3点(10･35･54)を図化している。何れも土錘であり、形態により二つに分類できる。

管状土錘…全体形が管状を呈し、長軸中央の孔を利用して漁網に装着するタイプ

有溝土錘…全体形が楕円形の滑車状を呈し、長軸両縁の溝を利用して漁網に装着するタイプ

10(第13図)･35(第18図)は有溝土錘であり、2条の溝を有している。溝断面はU字形を呈し、指頭圧痕が認められる。35の断面に粘土接合痕が認められる。

(5)　石製品

石製品は2点(36･37)を図化している。36(第18図)は叩石である。砂岩の偏平な円礫で、側面及び平坦面に敲打痕が認められる。37(第18図)は砥石である。砂岩を用い、3面に擦痕が認められる。何れもSX11から出土している。

(6)　木製品

木製品は1点(38)を図化している。38(第18図)は簡素な整形の刀子形をしている。祭祀具(形代)と考えられるが、異なる形状･用途の遺物である可能性を含んでいる。SX11から出土している。

まとめ

これらの遺物の多くは調査区西側に所在するSX11とその周辺遺構から出土したものである。当遺跡が機能していた時期の下限は、近江産と考えられる緑釉陶器や摂津型の土師器釜(煮炊具)の鍔部等が出土していることから、10世紀代(後半)に求めることができるが、周辺に存在したと考えられる曽我遺跡の主要部の消長をそのまま反映したものではなく、一部は中世前期(11世紀末)まで姿を変えて存続していたと考えられている。しかしながら10世紀頃における律令体制の崩壊と共に、全国的に官衙(国衙･郡衙)などの政庁施設の変質･消滅等が指摘されており[6]、このことは当遺跡(祭祀遺構)の消長と軌を一にすると考えられる。

第2節　祭祀空間としての曽我遺跡

曽我遺跡が立地する地理･歴史的環境を周辺の遺跡･遺物等から考察し、各地の祭祀関連遺跡と比較検討して当遺跡の位置付けを試みたいと考える。

当該地域の著名な祭祀関連遺物として、秋葉山系山麓丘陵先端部に鎮座する兎田八幡宮に伝わる中細形銅剣(国指定重要文化財)に動物絵画(シカ･サギ･カマキリ･カエル)の陽鋳が看取でき、その外見から弥生前期末～中期中葉頃の祭器として用いられたと考えられている。銅剣が発見された経緯については不明であるが、現在社が鎮座している丘陵一帯を信仰の対象として捉え、時代の推移と共に麓に埋納された可能性が指摘されている。

その山裾に所在する兎田柳ヶ本遺跡は、弥生後期後半～古墳時代初頭(3世紀中葉頃)の祭祀遺跡(墓域)としての位置付けが成されており[9]、山北川及び仏像構造線による断層急斜面(断層崖)を擁する北方山陵(秋葉山系)などが、弥生終末期から古墳時代初頭の祭祀･信仰と結び付いていた可能性が考えられている。遺跡は扇状地性堆積物により形成された標高約9m前後を測る微高地端部に立地しており、東方に山北川を臨む。付近には「小池」「馬渡瀬」「柳川」「曳ヶ池」などの小字が伝わっており、これらのホノギは天正16年(1588)の『長宗我部地検帳』(「香我美郡香宗分御地検帳」)に「馬ワタセ南川かけて」等と記載され、少なくともこの周辺が中世末期(近世初頭)まで水辺(頻水地形)であった可能性を示唆している。兎田柳ヶ本遺跡の祭祀空間(墓域)も水辺に臨む立地に所在していた可能性が考えられる。それは発掘調査時における排水性の低さや、多くの木製品(有機質)の遺存に裏付

けされているといえよう。遺跡から磁北方向に所在する断層崖中腹丘陵上の「大岩」の存在を以て、祭祀空間(墓域)の位置選定の目印として利用した可能性が、調査担当者により指摘されている。

丘陵と山裾の小河川を対象とした古墳時代前期(古式土師器Ⅲ～Ⅳ期)の祭祀遺構は、仁淀川下流域右岸に立地する天崎遺跡(10)(土佐市)でも確認されている。また同河川によって形成された自然堤防の後背地(氾濫原性低湿地)に立地する北ノ丸遺跡(11)(土佐市)でも古墳時代後期(6世紀頃)の木器(琴板・衣笠の鏡板など)を多数出土しており、水辺の祭祀が行なわれていた可能性が指摘されている。

当遺跡より約0.85㎞北方の山麓丘稜先端部に、古墳時代後期の築造とされている大崎山古墳が存在しており、付近には「ミヤケ」の小字が伝わっている。『長宗我部地検帳』にも記載がみられ、一帯の地目は耕作地となっているが、律令国家成立以前の地方統治機構としての「屯倉(みやけ)」を想起させるホノギであり、当該地周辺が先行期から重要な地域であったことを窺わせる遺称と考えられる。古墳時代において共同体の首長とその成員とで営まれていた祭祀行為が、古代国家の形成と発展と共に祭祀権も権力によって掌握・形骸化されていったであろうことは想像に難くない。

発掘調査等の成果により、地方官衙が神祇・祭祀面の機能も担っていたことが指摘されている。律令的祭祀の導入により、官衙近傍の水場などにおいて人形(ひとがた)・斎串・土馬・人面墨書土器などの祭祀遺物が大量に出土する祭祀遺跡が発見されており、但馬国府跡に近い祢布ヶ森遺跡や袴座遺跡(兵庫県豊岡市)などはその顕著な例であるとされている。また郡家近傍の祭祀遺跡としては、信濃国埴科郡家推定地に近い屋代遺跡群(長野県千曲市)で、湧水地から多数の木製祭祀遺物や木簡が出土している。美濃国武義郡家(弥勒寺東遺跡：岐阜県関市)近傍に位置する弥勒寺西遺跡でも、木製祭祀具や墨書土器を伴う水辺の祭祀遺跡が発見されている(12)。本県においても水辺に伴う古代の祭祀関連遺跡として、西鴨地遺跡や風指遺跡などが挙げられており、今後更に事例が増加してくるものと思われる。

当遺跡が官衙関連遺跡と考えられている曽我遺跡縁辺の山北川(旧河道)を臨む地形に所在し、古代においても各地で河川祭祀が営まれていたことを含めて、立地条件として十分な妥当性があると考えられる。これらのことから弥勒寺西遺跡で発見された水辺の祭祀遺構を参考に、当遺跡のSX11付近の検出状況について検討してみたい。弥勒寺西遺跡では古代の埋没した谷川を検出しており、下流で長良川へ注いだものと想定されている。この谷川からは、多数の木製祭祀具(斎串・人形代・舟形代・刀形代など)や墨書土器が出土している。土坑に曲物や底部を穿孔した甕などを埋設した井泉遺構が点在し、溝状の導水施設を伴う方形の張り出した岸辺や、その背後に日隠し塀と篝火の跡を検出しており、祭祀空間として整えられた一画と考えられている。また自然流路を渡る橋と考えられる板材や大形の掘立柱建物跡とみられる柱穴を検出している。その他の遺物としては、丸瓦・平瓦(凸面布目を含む)、鉄釘、銭、砚・灯明皿・漆容器として使用された須恵器、桃核・胡桃などの種子類、樺紐、砥石、石製紡錘車などの出土がみられる(13)。

当遺跡(SX11)においては、落込み部に張り出し状を呈する部分がみられ、背後にはピット状遺構を不整形な帯状に検出している。落込み部より検出した板材・樋などの遺物集中は、単なる廃棄の結果とするには不自然であり、意図的な行為による可能性も想定できる。また各地で湧水と流水を組み合わせた祭祀遺構が発見されており、SX11と切り合い関係にある溝状遺構(SD10)の存在も検討の対象となる可能性も考えられてくる。

祭祀遺構は明瞭な掘形を伴わず、祭祀遺物と土師器や須恵器などで構成され、場合によっては炭化物や焼土を伴うとされている。当遺跡における祭祀関連遺物は僅少で、限られた検出規模で遺跡の全容を判断することは容易ではないが、出土した遺物から祭祀関連遺構の可能性を考えてみたい。

当遺跡(SX11)から出土した祭祀関連遺物として、刀子形木製品の出土がみられる。木製祭祀具については律令体制の発展と深く関わった祭祀遺物としての位置付けが成されており、7世紀頃に登場し9世紀頃を盛期とする年代観が与えられている。本調査において出土した木製品についても、共伴遺物などによりこの範疇に帰属すると思われる。

供膳具として赤色塗彩を施した土師器を出土している。赤彩土師器は官衙や津などの性格を持つ遺跡からの出土がみられ、曽我遺跡(1988年度調査)でも搬入品と考えられる丹塗りを施した土師器(盤)を出土している。近年の発掘調査では、仁淀川流域の自然堤防上に所在する野田遺跡[14](土佐市)や、鏡川(神田川)右岸の微高地に立地する神田ムク入道遺跡[15](高知市)などから出土が確認されており、古代寺院や官衙関連施設の存在が指摘されている。物部川流域においても、山村遺跡群[16]や下ノ坪遺跡[17]などの大規模な官衙関連遺跡からの出土が報告されており、祭祀的(非常用品)な意味合いを含んでいる遺物と考えられる。

石製品では砥石と叩石を出土している。何れもSX11から他の遺物と共伴して出土しており、同時期のものと捉えることができる。古墳時代後期の祭祀遺構(具同中山遺跡群[18]・早咲遺跡[19]等)から複数の叩石が出土している例が報告されており、当該期の金属加工具の普及を考慮すれば、本調査において1点のみの出土であるが、祭祀行為との関連性も含めて検討する必要があると思われる。

当該期の製塩土器については、官衙或いは古代寺院関連遺跡からの出土例が報告されているが、比率には多寡がみられる。当遺跡周辺では下ノ坪遺跡から官衙関連遺物と共に出土しており、関連性が指摘されている。曽我遺跡の調査では付札状木製品を検出した区域からの出土がみられたが、本調査では確認していない。製塩土器における塩の生産と流通は、古代律令国家体制と共に8世紀後半～9世紀前半頃を中心に運用していたと考えられ、交通・流通の要衝に立地する官衙などにおいて出土例が多く認められる。祭祀との関わりについても指摘がなされているが、律令国家体制の衰退と共に姿を消し、本県においても10世紀以降の官衙関連遺跡からの出土はみられなくなる。

注目されるのは、県内の製塩土器の出土する遺構や遺跡から土錘の出土頻度が高いことである。土錘の出土は漁網(漁労生産業)の存在を示しており、香南地域では曽我遺跡や下ノ坪遺跡など水辺(河川等)に近在する遺跡からの出土例が報告されている。これまで最も多くの製塩土器を出土した下ノ坪遺跡では土錘の出土数も比較的多く、有溝土錘と管状土錘の2種類が出土しており、少量ながら棒状土錘も確認している。出土した土錘の存在について考察してみれば、貢納用の水産物に関する可能性も考えられるが、県西部の風指遺跡などでは出土状況から祭祀関連の可能性が指摘されている[20]。本調査において土錘は少量の出土を確認している。

その他の遺物として桃核等の種実遺体を複数個出土しており、儀礼行為との関連性も考慮される。曽我遺跡で検出した官衙関連施設とみられる掘立柱建物跡(SB2・6)の柱穴の掘形から、地鎮のためと考えられる桃核の種実遺体を出土している。この掘立柱建物跡の成立時期は、出土した緑釉陶器などから9世紀代(前・中～後期)の範疇で捉えられている。

古代の祭祀遺跡から緑釉陶器が出土することは、長岡京(8世紀後半)の内然流路から多数の祭祀遺物と共に出土している例などから広く認識されており、当遺跡出土の緑釉陶器も少量の出土ながらその個体の性格に符号すると考えられる。当時の流通品の中においても特別な稀少品であるとされ、官衙関連遺跡でも曽我遺跡や国衙関連遺跡を除くと出土量は僅少であり、これは当該期の緑釉陶器などが祭祀具としての側面を持つ可能性を示唆していると考えられる。施釉陶器生産における祭祀的側面の存在は、緑釉陶器の出現期に初めて生起したものではないと考えられており、先行して生産されていた施釉陶器(二彩・三彩陶器)においても、主として非常用品的な面を持つ儀器である器種が多く、その出土場所も寺院や祭祀遺跡に集中するという現象がみられている[21]。当遺跡で営まれていた祭祀行為は、緑釉陶器(奢侈品)や共伴出土した陶硯(円面硯)などの属性から、官司や高位階層と関連する様相が指摘でき、律令的な祭祀(官祭)としての位置付けが成されるものと考えられる。

当遺跡が祭祀空間であったと考えられる可能性の一つとして、曽我遺跡の官衙域との位置関係に注目したい。愛媛県松山市久米官衙遺跡群(久米高畑遺跡)の北西に位置する前川遺跡は、墨書土器や斎串・墨痕を残す木簡状木製品(人形)・蒜炭類の残火遺物などを出土し、自然石を配した河川周辺の祭祀遺跡と考えられており、官衙遺跡群に隣接して来住廃寺跡が所在している。弥勒寺西遺跡も官衙施設(弥勒寺東遺跡)・寺院(弥勒寺跡)と尾根を隔てて所在しており、意図的に祭祀空間を官衙域(政庁)より隔離していることが窺える。当遺跡においても、推定ながら官衙域と考えられている徴高地(自然堤防)より北西方向にやや隔たった縁辺部に所在している。曽我遺跡からは僅少ではあるが瓦片の出土もみられ、祭祀空間を含めた周辺の景観を復原(空間的具現化)することで、郡家(官衙)と寺(郷寺)社・祭祀施設(「蔵所」)という政・祭両面に亘る地方官衙の様相が、有機的に関連付けられて解明されていくものと思われる。

第3節　交通・流通からみた香宗川流域

香宗川流域に展開する官衙関連遺跡として、近年の発掘調査で円面硯や瓦当(複弁八葉蓮華文)などを出土した東野土居遺跡[22]が注目されている。官衙関連とみられる掘立柱建物跡や大溝を検出しており、出土遺物などから付近に寺院等の施設が存在していた可能性が指摘されている。曽我遺跡を含めた地方官衙の様相を復原する上で、今後の調査結果に期待したい。ここでは流域に展開する官衙関連を含めた遺跡群について検討すると共に、当遺跡の果たした役割について考察してみたい。

古墳時代初頭頃から中世にかけて、香宗川下流域右岸(古期扇状地)を中心とした遺跡群が存在する背景の一つには、地理的に香宗川から支流(山北・山南川)に至る交通手段の結節点として位置付けられることが考えられる。流域に展開する遺跡群は、畿内を中心とした地域と密接な関係が考えられ、畿内方面との交通手段を検討すると、外洋(土佐湾)から香宗川に入り、更に山北川という水運ルートを頻繁に利用していたと推定できる。香宗川河口付近の浜堤に所在する江見遺跡、下流域の自然堤防(段丘低位面)上に立地している東野土居遺跡、山北川を臨む徴高地に立地する兎田柳ヶ本遺跡から、完形に近い庄内式土器(甕)が出土している。また山南川右岸の河岸段丘上に立地している拝原遺跡[23]からも、河内からの搬入品と考えられる古式土師器(庄内式後半)を出土しており、古

墳時代初頭頃には同河川に依拠する水系集落群として展開していた可能性が考えられる。

律令期には各地に官衙関連施設(郡家・郷家等)の成立がみられるようになる。布目瓦片を出土した拝原遺跡との関係が指摘されている十万遺跡[24]は、香宗川と支流(山南川)を臨む丘陵縁辺の微高地に立地している。企画的建物群が8世紀第3四半期頃に出現するが、その規模を維持することなく繁栄を終えている。十万遺跡に後続する形で盛期を迎えるとされている曽我遺跡は、香宗川と支流(山北川)との結節点を扼する自然堤防上に所在していたと考えられている。河川水運の掌握を意識した占地とみられ、貢進物の集積・運搬に香宗川を利用していたとされている。十万遺跡から曽我遺跡への変遷は、海上交通にも至便な後者の機能がより重要になった結果とも考えられている[25]。

香宗川は下流域の河床勾配が小さく、水運利用には適した条件を備えているが、一方で河川氾濫という自然災害も伴ってくる。当該地が宗我郷内において重要な場所としての位置付けが成され、祭祀行為が営まれていた可能性は同章第2節で既述したが、県内における交通・流通(水運)の結節点に所在する主な河川祭祀遺跡として西鴨地遺跡の例が報告されている。

西鴨地遺跡は土佐市の中心部である高東平野の西端に位置しており、平野の南部は仁淀川の1次支川波介川が蛇行しながら東流し、河口付近で仁淀川に注いでいる。遺跡は波介川上流域に形成された沖積地に立地しており、標高約12m前後を測る。波介川は緩流河川であり水運に適しているが、低奥型地形のため内水による水害を受けやすく、流域は氾濫原性の低湿地が拡がっている。遺跡は9～10世紀頃を中心とする古代の遺物が主体を成しており、その大半が水路として利用されていたと考えられる自然流路から出土している。流路内からは緑釉陶器を含む多くの搬入品や製塩土器、官的祭祀遺物とみられる木製祭祀具と共に桃核等の種実遺体を複数出土している。また多景の端部炭化材が見つかっており、何らかの祭祀行為が営まれていた可能性が指摘されている。当該地が幡多方面への街道に近接する交通の要衝(結節点)であることや、青銅製帯金具などの出土がみられることから、物資の集積或いは交通を司る官衙、官司層の居宅等に関連する施設が存在したと考えられており、農耕儀礼・祖霊信仰などと共に交通・流通に関わる祭祀が行われていた可能性も考慮される。

曽我遺跡においても、律令期の要路(南海道)が当該地周辺に比定される見解が示されている。阿波経由の「養老新道」(719)は、香長平野を横断する幹道と想定されており、官道の直進指向を考慮し、条里地割(「香長条里」)の企画方位に沿って検討すれば、南国市篠原の住吉通り付近から、香宗川と支流との合流点付近(香宗川橋近辺)を結ぶ周辺に比定されると考えられる。物部川右岸域では野中廃寺跡(南国市)などが近在し、旧香美・長岡郡境付近には「カントヲリ」の小字も残されている。物部川と交差する地点では下ノ坪遺跡や深渕遺跡[26]などが所在しており、「渡津」として機能していた可能性が指摘されている。「野市町小字図」には地籍(地割)が企画的に配され、物部川以東においても段丘上に直進性が看取でき、香宗川を臨む土居付近では中世に至って城館(香宗城跡)の成立をみる。『長宗我部地検帳』には比定地周辺に「大道」の存在を示す記述が散見でき、関連性が考慮される[27]。

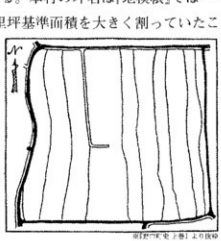
官衙や古代寺院を検討する場合、官道(陸路)の存在が重要となると考えられるが、河川・海上交通との関連性を含めて、それぞれの地域の地理的特徴を考慮する必要があると思われる。当遺跡で考えられている祭祀行為の内容については明らかにすることは難しいが、これらの交通・流通の妨げとなる河川の氾濫に対する祭祀と捉えることも、一つの可能性として考えられる。

第4節　条里地割

畦畔や溝渠(用水路)・道路などによって碁盤の目のように正方形に区画され、この区画が広い範囲に連続してみられる地割を条里地割と呼称している。嘗てはこれらの全てが古代の律令制度の下で実施された「条里制地割」の名残であると考えられていた。これは一辺が一町(約109m)方形の坪を基準として区画した耕地を指し、一つの坪は更に10に区画されている。区画方法には二つの形式があり、縦長に10等分した地割を「長地型」、中央で二分して各筋に分割した地割を「半折型」と呼ぶ。この一町四方の坪を縦6×横6に集合した36の坪を里と称して、それぞれの里は起点から順に何条何里と名付けられた。これは律令制度下で、公地を支給(口分田)するという班田収受の制度を効率的に施行するための土地区画であると考えられてきたが、近年各地で行なわれた発掘調査によって全てが畿内のような律令制度に基づく「条里制地割」ではなく、比較的新しい時期に造成された「条里的地割」もあることが判明してきた(28)。長野県千曲市に所在する「更埴条里」では、現条里地割の下部に9世紀後半の洪水によって埋没したと考えられる原初条里が確認されている。地表面にある現条里地割とは畦畔や水路の方向を異にしているとみられていたが、近年の成果により比較的忠実に再施工していた可能性が指摘されている(29)。またそれに伴う発掘調査では国符・郡符木簡をはじめ多量の木製品などが出土し、北側の自然堤防上に官衙の存在も想定されている。官衙と条里遺構との関係については、官衙関連遺跡で検出している建物群等の企画方位と条里地割がほぼ同調している場合が多いことが指摘されており(30)、官衙近傍に条里水田が展開していた可能性が考えられている。

当遺跡周辺の条里関連地名として、本調査区に近接して「中ノ坪」の坪名(切図)が残っている。中ノ村岩田橋の東北方に所在し、県道(「香北・赤岡線」)と岩田橋から北進して本村に通ずる道路に挟まれたほぼ四角形の旧圃で、長地型地割を呈している。『長宗我部地検帳』にも記載がみられ、富家ノ村に属している。同筆に「同し道ヲ詰テ」とあり、道などにより区画されていた可能性が考えられる。『地検帳』に記された面積が1町18代であるのに対し、切図面積は9反9畝19歩弱で、『地検帳』当時よりほぼ坪面積(約1町歩＝10反)に近い状態が維持されていることが窺える。

香南地域の条里地割の基準線(里界線)と考えられているのが、野市町本村の築地神社前に現存する「市ノ坪」と赤岡町橋本の「一ノ坪」を結ぶ線であるとされている。本村の坪名は『地検帳』では「一ノ坪」と記載されているが、面積は2反4代1歩で、当時既に条里坪基準面積を大きく割っていたことが分かる。昭和6年竣工の松葉谷・黒谷溜池構築に伴う耕地整理で現在は旧態を存していない。橋本の「一ノ坪」の切図面積は4反6畝6歩で、比定地の景観は原状とは異なるが、共に数詞坪一ノ坪であることから、この線を基準として東西に里・坪を地図上の距離計測に従って方格線を設定すれば、条里地割が復原できると考えられている(31)。基点の設定箇所により若干の齟齬が生じる可能性が指摘されているが(32)、第23図に示した復原里界線の方位は約N-13°-Eであり、「香長条里」(N-12°-E)の方向性とほぼ同調している。



第22図「中ノ坪」切図

※大日本帝國陸地測量部（明治 40 年測量 昭和 8 年修正 ）1：25,000 後免を基に『野市町史』附属地図「野市町小字図」を参考に作成。

第 23 図　曽我遺跡周辺の小字図及び復原里（坪）界線 (S=1/10,000)

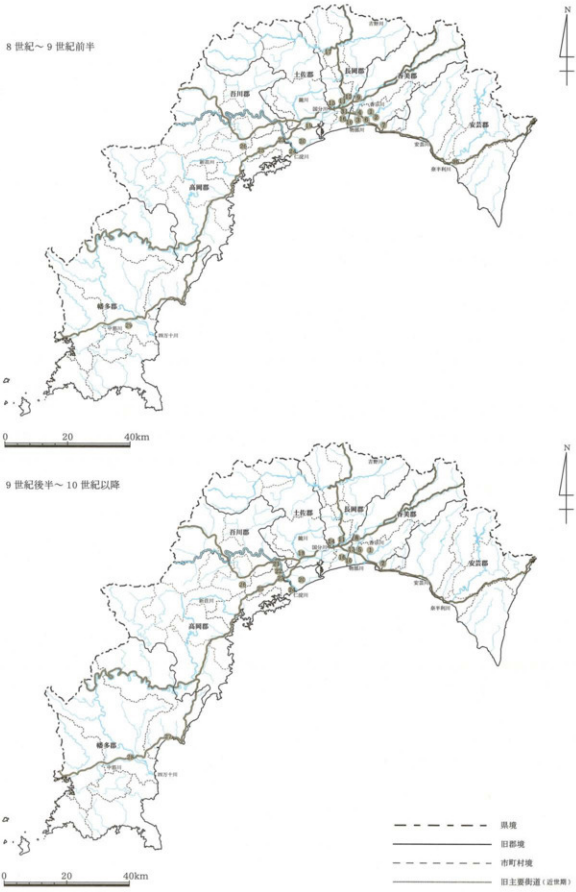
当遺跡は小字「シイレイダ」(現「岩田改良田」)付近に比定されると考えられ、「地検帳」に上曽我村として「シレイタ」のホノギが記載されており、中世末期(近世初頭)まで遡る小字とみられる。現在「中ノ坪」などの固有名詞坪は参考的位置付けとされているが、数詞坪が変化したものと捉えられており、条里地割を復原する上で重要な史料と成り得ると考えられている。

当該地域の条里地割の基準線とされている里界線が、当調査区付近に比定される可能性が考えられ、条里遺構と官衙関連施設との関係が指摘されていることから、条里(方格状)地割と当遺跡との関連性を検討してみたい。調査区北端から延伸する溝状遺構(SD1)はN-10°-Eで検出しており、方格状地割との差異を認めながらも、ほぼ則していると考えられる。また調査区中央付近で検出している溝状遺構(SD2)の方向はN-78°-Wで、方格状地割と直交している。床面からは遺構成形時の土工具痕と考えられる不整形な小穴を連続して確認しており、流水を伴わず、路面が溝状を呈する道路状遺構の可能性も考えられるが、形状から比較的短期間で埋没したとみられ[33]、機能・用途については不明である。当調査区において検出した溝状遺構の方向は方格状地割にほぼ則しており、関連性が期待できるものの、何れも断面は数㎝程度であり、当遺跡が祭祀空間であった可能性も含めて、「中ノ坪」の切図にみられるような地割の痕跡を確認することは困難であるといえる。

香宗・山北川は下流域で曲流し、一帯は氾濫の常襲地帯として旧河道の乱流もみられ、合流点付近では傍証ながら「流レ田」(「流田」「地検帳」)の小字も伝わっている。周辺の地割は乱れているが、同一方位を持つ方格状地割の名残とみられる痕跡も不明瞭ながら断続的に認められ、古代～中世(近世)にかけての条里的地割が遺存している可能性が考えられる。曽我遺跡の当該期の掘立柱建物跡の棟方向はN-8～9°-Eであり、条里施工期との関係について検討すれば、建物群等の企画方位と条里地割との同調性が指摘されており、現条里地割(N-12°-E)との小差は、再施工等による時期差の可能性を含んでいる。香宗川流域の方格状地割は、物部川下流域右岸(新期扇状地)を中心とする「香長条里」との統一性(連続的分布)が指摘されているが[34]、当該地は非条里地域と考えられている古期扇状地による段丘を隔てて所在しており、背景等を同じくする局所的条里の可能性も考慮される。小字「曽我」付近に比定される里界線(現県道「稗地・中ノ村線」)を東方へ延伸すれば十方遺跡が存在している。検出した企画的建物群(8世紀代)の棟方向は約N-21～25°-Eであり、条里地割とは方向を異にしている。「養老新道」の整備後に条里地割を施工したと考えた場合[35]、変遷の時期を含めた曽我遺跡との関係が注目される。洪水等により埋没した可能性が考えられる原初条里との関連も含めて、当該地の条里地割の考察には慎重な検討が求められ、その評価が課題となる。

【註】

(1)高橋啓明・吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年
(2)島内洋二「徳王子前島遺跡」『埋文こうち第22号』高知県教育委員会　2009年
(3)下村　裕「花宴遺跡」『埋文こうち第20号』高知県教育委員会　2007年
(4)小川博敏「徳王子広本遺跡」『埋文こうち第21号』高知県教育委員会　2008年
(5)出原恵三「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』高知県教育委員会　1989年
(6)出原恵二・松村信博『西鴨地遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2001年



第 24 図　高知県の主な官衙関連（緑釉陶器・陶硯出土）・寺院跡位置図

No.	遺跡名	所在	立地	緑釉陶器	陶硯	主な出土遺物	遺跡の位置付	備考	古代の主要時期
1	曽我遺跡	香南市野市町中ノ村曽我	香宗川と山北川の両河川に挟まれた自然堤防上	椀・皿・壺	円面硯6 転用硯4	須恵器・土師器・墨書土器・黒色土器・灰釉陶器・瓦・製塩土器・白磁・木製品	官衙関連遺跡（郷家または郡家クラスの役所?）	猿投窯1点、京都産44点出土(壺:9世紀前半/壺以外:9世紀中頃～後期)	Ⅰ期:8世紀後半～9世紀前半 Ⅱ期:9世紀中頃～
2	十万遺跡	香南市香我美町十万	香宗川左岸の丘陵縁辺部の微高地			須恵器・土師器・灰釉陶器・土錘・瓦器・青磁・白磁・石製品方	官衙関連遺跡		8世紀中頃～後半
3	下ノ坪遺跡	香南市野市町上岡	物部川下流左岸	緑釉単彩陶器火舎	円面硯4 風字硯1	須恵器・土師器・赤彩土器・黒色土器・灰釉陶器・製塩土器・土錘	官衙関連遺跡		Ⅰ期:8世紀中頃前後 Ⅱ期:8世紀後半～9世紀初頭 Ⅲ期:9世紀前半～中頃
4	深渕遺跡	香南市野市町深渕	物部川河口から4kmほど上流の左岸	椀・皿	円面硯1 風字硯1	須恵器・土師器・刻書土器・墨書土器・二彩陶器・三彩陶器・瓦・鴟尾・土錘	官衙関連遺跡		8世紀～9世紀前半
5	深渕北遺跡	香南市野市町深渕	物部川河口から5kmほど上流の左岸	椀・皿		須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・土錘・瓦・瓦器・青磁・白磁	集落跡(川津?)		9世紀後半～12世紀代
6	東野土居遺跡	香南市野市町東野土居	香宗川右岸	不明	円面硯2	須恵器・土師器・瓦・青磁・白磁・瓦質土器・備前焼	官衙関連遺跡? 集落跡		8世紀(後半)～
7	口槇ヶ谷遺跡	香南市夜須町字出口・千切	夜須川左岸の低位河岸段丘(開析谷斜面裾部)			須恵器・土師器・青磁・瓦器・瓦質土器・備前焼・土錘	官衙関連遺跡? 集落跡		Ⅰ期:8世紀後半～9世紀前半 Ⅱ期:9世紀後半以降
8	ひびのきサウジ遺跡	香美市土佐山田町	物部川右岸の河岸段丘	皿		須恵器・土師器・緑書土器・移動式竈・土錘	有力豪族の館?	9世紀後半	9世紀後半
9	須江上段遺跡	香美市土佐山田町	新改川の扇状地		円面硯2	須恵器(双耳壺)・土師器・土錘	官衙関連遺跡(駅跡・駅家?)		8世紀～9世紀
10	田村遺跡群	南国市田村	物部川下流右岸自然堤防上	椀・皿	円面硯1	須恵器・土師器・赤彩土器・移動式竈・製塩土器	官衙関連遺跡	京都産	Ⅰ期:8-9世紀初頭～10世紀前半 Ⅱ期:10世紀後半～
11	土佐国分寺跡	南国市国分	国分川右岸	皿		須恵器・土師器・瓦	古代寺院跡	平安時代前半	8世紀後半～10世紀代
	土佐国衙跡	南国市比江字金屋	国分川右岸	椀・皿	円面硯5 風字硯2 転用硯1	須恵器・土師器・黒色土器・土錘	官衙跡	京都・近江(平安Ⅱ古段階)/東海産(平安Ⅱ新段階)	8世紀前半～12世紀前葉
12	白猪田遺跡	南国市久礼田	新改川と領石川が国分川に合流する扇状地	皿(輪花)		須恵器・土師器・製塩土器	「国府集落」		8世紀代
13	若村遺跡群	南国市稲生	物部川河口から5kmほど上流の右岸	椀・皿		須恵器・土師器・土錘・青磁・白磁・鉄鉢・瓦質土器	城館跡・川津としても機能		9世紀後半～10世紀中頃
14	奥谷南遺跡	南国市岡豊町小蓮	国分川右岸の丘陵上	段皿	転用硯1	須恵器・土師器・黒色土器・白磁・青磁・瓦・移動式竈	寺院関連遺跡	猿投K-90窯式・9世紀後半頃	9世紀後半
15	栄エ田遺跡	南国市岡豊町定林寺字栄エ田	国分川右岸の山麓		円面硯1	須恵器・土師器・瓦・瓦器・青磁・白磁	集落跡?		8世紀後半代
16	西野々遺跡	南国市大埇字西野々・竹中	物部川扇状地先端部	椀・皿	転用硯8	須恵器・土師器・製塩土器・土錘・黒色土器・灰釉陶器・瓦・瓦質土器・青磁・白磁	官衙関連遺跡(郷家?)		8世紀後半～10世紀
17	[illegible]ノ尻遺跡	長岡郡本山町本山字[illegible]ノ尻	吉野川右岸の中位段丘上	杯(椀)		須恵器・土師器	駅家関連遺構?		
18	尾立遺跡	高知市尾立	鏡川中流域左岸	椀		須恵器・土師器・瓦質土器・青磁・備前焼	鏡川中流域の流通拠点		10世紀前半頃
19	神田ムク入道遺跡	高知市神田	鏡川支流神田川右岸			須恵器・土師器・赤彩土器・製塩土器・土錘	集落跡		8世紀前半～9世紀
20	西分増井遺跡	高知市春野町西分	新川川左岸	椀・皿		須恵器・土師器・製塩土器・土錘	集落跡・祭祀		8世紀前葉～10世紀
	馬場末遺跡	高知市春野町西分	新川川左岸			須恵器・土師器・製塩土器・黒色土器・灰釉陶器・移動式竈?	集落跡		8世紀前葉～10世紀
	山根・石屋敷遺跡	高知市春野町石屋敷	新川川右岸	皿(盤)			大寺・稲間寺間に位置する豪族?		
21	城ヶ谷山遺跡	吾川郡いの町大内地内鎌田	仁淀川中流域平地	椀		須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・青磁・白磁	川津?		10世紀前半頃
22	天崎遺跡	土佐市高岡町乙	仁淀川右岸の後背湿地	皿		須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・青磁・白磁・木製品	集落跡祭祀(古墳時代)	畿内産(9世紀前半～10世紀)	10世紀～13世紀前半(9世紀後半)
23	光永・岡ノ下遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸の自然堤防上	椀・皿		須恵器・土師器・黒色土器・湖州鏡・土錘	祭祀(古墳時代)官衙関連(古代) 集落跡(中世)	京都産が殆どを占める(9世紀後半～10世紀前半)	9世紀後半～10世紀前半
	野田廃寺跡 野田遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸の自然堤防上			須恵器・土師器・黒色土器・赤彩土器・二彩陶器・瓦	寺院跡　集落跡		8世紀末～9世紀前半(8世紀中頃～10世紀)
24	上ノ村遺跡	土佐市新居上ノ村	仁淀川下流域右岸	椀・皿 耳皿		須恵器・土師器・製塩土器・土錘・瓦器・常滑焼・青磁・白磁	川津的な集落遺跡	洛北・洛西・近江産	Ⅰ期:9世紀前半代 Ⅱ期:10世紀前半 Ⅲ期:10世紀末～11世紀初頭
25	西鴨地遺跡	土佐市西鴨地字バデン	高岡平野の西端仁淀川の支流波介川上流域の沖積地	椀・皿		須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・製塩土器・土錘・木製品・帯金具	祭祀関連遺跡	洛西産	8世紀中葉～10世紀末頃
26	上美都岐遺跡	高岡郡佐川町	斗賀野盆地東部幸田川右岸		円面硯1	須恵器・土師器・刻書土器	官衙関連遺跡		8世紀後半～10世紀
27	宮崎遺跡	幡多郡黒潮町(大方町)加持	加持川の支流?鯛川左岸	椀・皿	転用硯6	須恵器・土師器・黒色土器・製塩土器・刻書土器	官衙関連遺跡(郷家)	京都産(洛西産?)	9世紀後半
28	具同中山遺跡群	四万十市具同	中筋川左岸の自然堤防上	椀・皿?		須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器・青磁・白磁・土錘	集落跡		9世紀後半～11世紀中葉
29	船戸遺跡	四万十市森沢	中筋川右岸 自然堤防上	皿		須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・土錘	川津	洛北・洛西・近江産	8-9世紀～10世紀
	風指遺跡	四万十市森沢	中筋川右岸 河岸段丘上	皿		須恵器・土師器・黒色土器・土錘	官制的祭祀	京都産	9世紀～10世紀
30	コゴロク廃寺跡	安芸郡奈半利町字中里・他	奈半利川下流域左岸			須恵器・土師器・瓦・土錘	古代寺院跡		7世紀～9世紀
31	野中廃寺跡	南国市野中字仁尾	物部川扇状地				古代寺院跡		

※1. 筒井三菜：古代の掘立柱建物跡と遺物1(『田村遺跡群Ⅱ　第9分冊 総論』2006年)所収「県内の緑釉陶器・陶硯出土遺跡一覧表」を参考に作成。
※2. 東野土居遺跡・城ヶ谷山遺跡・野中廃寺跡は未刊行のため参考資料。

第4表　高知県の主な官衙関連(緑釉陶器・陶硯出土)・寺院跡一覧表

(7)池澤俊幸氏の御教示による。

(8)佐々木恵介「国衙・郡衙の遺構はなぜ10世紀に消滅するか」

『新視点 日本の歴史3』新人物往来社 1993年

(9)松村信博「兎田柳ヶ本遺跡の性格」『兎田柳ヶ本遺跡』香南市教育委員会 2010年

(10)松村信博・田坂京子・山本雄介・下村　裕他『天崎遺跡』㈶高知県埋蔵文化財センター 1999年

(11)出原恵三『北ノ丸遺跡』㈶高知県埋蔵文化財センター 2004年

(12)佐藤　信『古代の地方官衙と社会』山川出版社 2007年

(13)田中弘志『律令体制を支えた地方官衙 弥勒寺遺跡群』新泉社 2008年

(14)徳平淳子『野田遺跡Ⅱ・野田廃寺』㈶高知県埋蔵文化財センター 2005年

(15)浜田恵子『神田ムク入道遺跡 現地説明会資料』高知市教育委員会 2010年

(16)浜田恵子『田村遺跡群Ⅱ 第4分冊』㈶高知県埋蔵文化財センター 2004年

(17)池澤俊幸『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年

(18)廣田佳久・田坂京子・山本純代『具同中山遺跡群Ⅲ-3』㈶高知県埋蔵文化財センター 2002年

(19)廣田佳久『早咲遺跡』大方町教育委員会 1991年

(20)田坂京子「製塩土器と土錘について」『具同中山遺跡群Ⅲ-3』㈶高知県埋蔵文化財センター 2002年

(21)秋山浩三「緑釉陶器・竈類の祭祀的側面」『日本古代社会と物質文化』青木書店 2007年

(22)筒井三菜・下村　裕「東野土居遺跡 現地説明会資料」㈶高知県埋蔵文化財センター 2010・2011年

(23)出原恵三『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年

(24)高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年

(25)池澤俊幸『土佐国』『日本古代道路事典』八木書店 2004年

(26)高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年

(27)(25)及び更谷大介「『長宗我部地検帳』と発掘調査成果からみる上岡地区の景観」『上岡北遺跡』

香南市教育委員会 2008年

(28)川上　元「条里制地割と条里的地割」『歴史考古学を知る事典』東京堂出版 2006年

(29)金田章祐『古代景観史の探求』吉川弘文館 2002年

(30)(25)に同じ

(31)『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992年

(32)第23図に示した里(坪)界線は、上記の説に基づいて地図上に再現した概念図であり、実証的結果を開したものではない。当該地域における条里(的)地割の検討については今後の課題と考える。

(33)山中敏史『古代の官衙遺跡 Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所 2003年

(34)大脇保彦「土佐の条里」『高知県の研究2』清文堂出版 1982年

(35)(25)に同じ

【参考・引用文献】

池澤俊幸「土佐における古代の遺跡」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』

古代学協会四国支部・㈶高知県埋蔵文化財センター 1998年

森　公章編『古代国家の形成 史跡で読む日本の歴史3』吉川弘文館 2010年

写真図版

図版 1

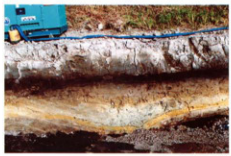
調査区遠景

調査前風景

調査区東側 遺構検出作業

図版 2

調査区東壁セクション



旧自然流路

SD2 完掘状態

SD1 完掘状態

SX3 土錘出土状態

SX11 遺構掘削作業

SX11 円面硯出土状態

遺物出土状態

遺物出土状態

SX11

図版 4

遺構出土遺物（土師器・須恵器・土錘・緑釉陶器）

上面から

34

18

19

34

19

34

21

底面から

27

29

30

28

33

SX11 出土遺物（土師器・須恵器）

図版 6

SX11 出土遺物（土師器・須恵器・石製品・木製品）

ピット出土遺物

39

41

包含層出土遺物

内面

須恵器転用硯

外面

51

54

52

42

49

43

49

45

遺構・包含層出土遺物（須恵器・土師器・土錘・磁器）

図版 8

40

40

53

53

15

15

15

緑釉陶器

報告書抄録

ふりがな	そがいせき
書名	曽我遺跡
副書名	中ノ村地区経営体育成緊急支援事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	宮地啓介・松村信博
編集機関	高知県香南市文化財センター
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 TEL 0888-54-2296
発行年月日	2011年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
そがいせき 曽我遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちうなかのむら 野市町中ノ村	39211	200038	33° 34′ 11″	133° 43′ 44″	平成14年 9月2日 ～ 10月3日	500㎡	経営体 育成緊急 支援事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曽我遺跡	祭祀跡	古代	溝状遺構 性格不明遺構 (祭祀跡) ピット状遺構	土師器 (赤彩土師器) 須恵器 (円面硯・転用硯) 緑釉陶器 土錘 木製品(祭祀具)	官衙関連遺跡の縁辺部に所在する祭祀跡の可能性

高知県香南市発掘調査報告書第6集

曽我遺跡

中ノ村地区経営体育成緊急支援事業に伴う発掘調査報告書

2011年3月

発行　高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター
〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1
TEL　0887-54-2296

印刷　香南市野市町西野45
半田印刷